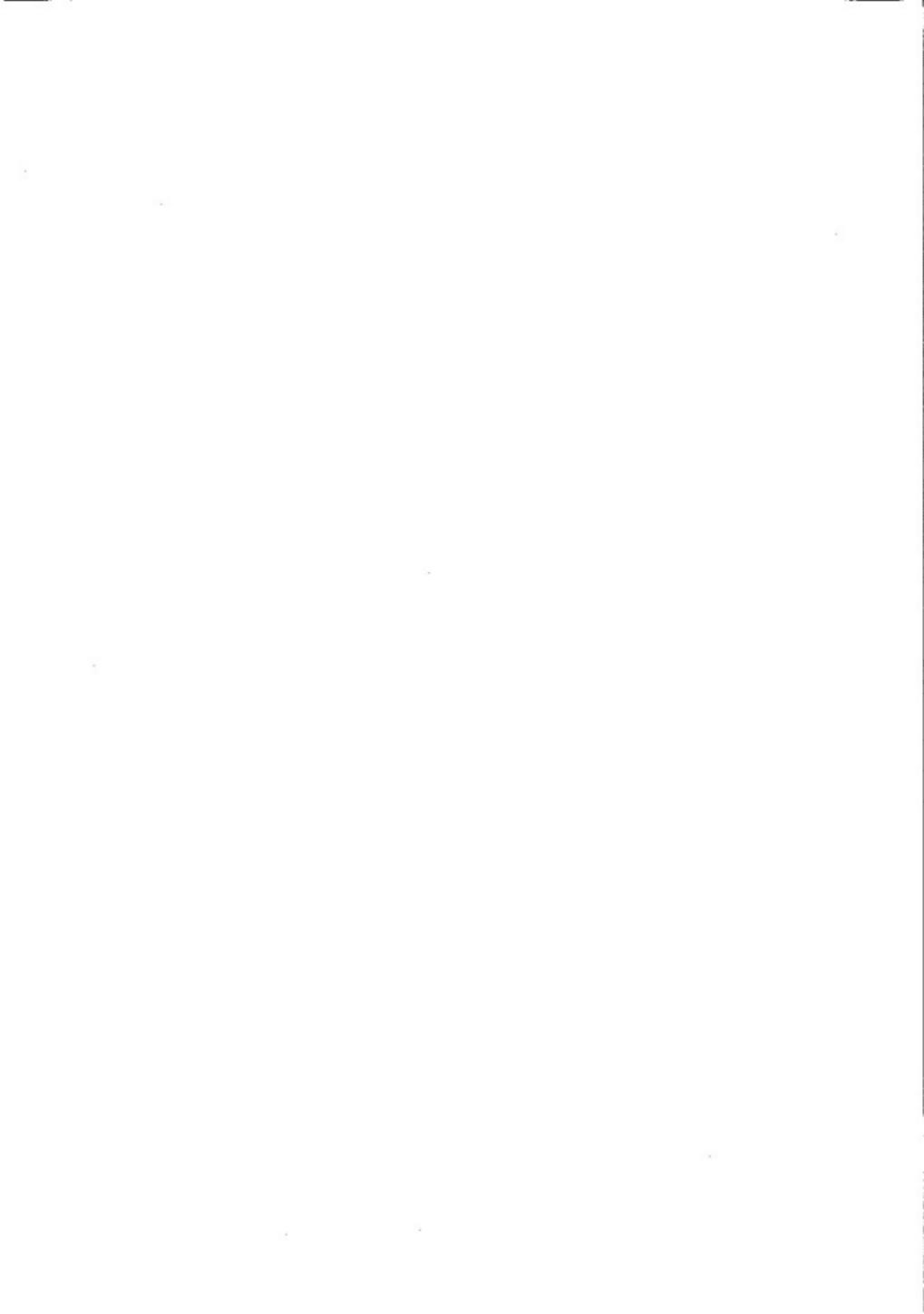


財團
法人 八尾市文化財調査研究会報告99

- I 植松遺跡（第9次調査）
- II 郡川遺跡（第5次調査）
- III 心合寺山古墳（第6次調査）
- IV 東郷遺跡（第65次調査）
- V 水越遺跡（第9次調査）

2007年

財團法人 八尾市文化財調査研究会



財団
法人 八尾市文化財調査研究会報告99

- I 植松遺跡（第9次調査）
- II 郡川遺跡（第5次調査）
- III 心合寺山古墳（第6次調査）
- IV 東郷遺跡（第65次調査）
- V 水越遺跡（第9次調査）

2007年

財団法人 八尾市文化財調査研究会

はしがき

八尾市は大阪府の東部に位置し、旧大和川が形成した河内平野の中心部にあたります。八尾市は古くから人々の生活の場として栄えていた地域であり、現在でもそれらの先人が残した貴重な文化遺産が数多く存在しております。

近年、都市開発が進み各種土木工事等が増加するなか、開発に伴う発掘調査を実施することにより、これらの文化財を破壊から守ること、また発掘調査による記録保存を行い、市民の財産である文化財を後世に伝承することが我々の責務であると認識する次第であります。

本書は、平成17～18年度に行いました公共事業に伴う発掘調査の成果を収録したものであります。

今回報告する遺跡のうち特に植松遺跡第9次調査では奈良時代の居住域が存在することが判明しました。また、心合寺山古墳第6次調査では平安時代後期の落ち込みを検出し、この落ち込みは心合寺山古墳の後円部に沿ったカーブを描いていることから、古くは周濠であった可能性も考えられます。さらに水越遺跡第9次調査では土師器、須恵器のはか丸瓦や平瓦が出土した河川堆積を確認しており、当調査地の東側にこれらの遺物を必要とした遺跡が存在していた可能性が高いと思われます。これらの調査によって得られた情報は、当時の人々の生活や社会の変化を知る上で貴重な役割を果たしています。

本書が学術研究の資料として、また文化財保護への啓発に広く活用されることを願うものであります。

最後になりましたが、この発掘調査が、関係諸機関及び地元の皆様の多大なる御理解と御協力によって進めることができましたことに深く感謝の意を表します。今後とも文化財保護に一層の御理解・御協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成19年3月

財団法人 八尾市文化財調査研究会
理事長 岩崎健二

序

1. 本書は、財団法人八尾市文化財調査研究会が平成17年度および平成18年度に実施した、公共事業に伴う発掘調査の成果報告を収録したもので、内業整理及び本書作成の業務は各現地調査終了後に着手し、平成19年3月をもって終了した。
1. 本書に収録した報告は、下記の目次のとおりである。
 1. 本書に収録した各調査報告の文責は、I・II西村公助、III島田裕弘 IV荒川和哉 V樋口 喜で、全体の構成・編集は西村が行った。
 1. 本書掲載の地図は、大阪府八尾市役所発行の2,500分の1(平成8年7月発行)・八尾市教育委員会発行の『八尾市埋蔵文化財分布地図』(平成13年度版)をもとに作成した。
 1. 本書で用いた高さの基準は東京湾標準潮位(T.P.)である。
 1. 本書で用いた方位は磁北及び座標北(国土座標第VI系〔日本測地系〕)を示している。
 1. 遺物実測図は、断面の表示によって下記のように分類した。
弥生土器・土師器・瓦器-白・須恵器・陶磁器-黒・木器・瓦-グレースクリーントーン
 1. 土色については『新版標準土色帖』1997年後期版 農林水産省農林水産技術会議事務局・財團法人日本色彩研究所色票監修を使用した。
 1. 各調査に際しては、写真・カラースライド・実測図を、後世への記録として多数作成した。各方面での幅広い活用を希望する。

目 次

はしがき

序

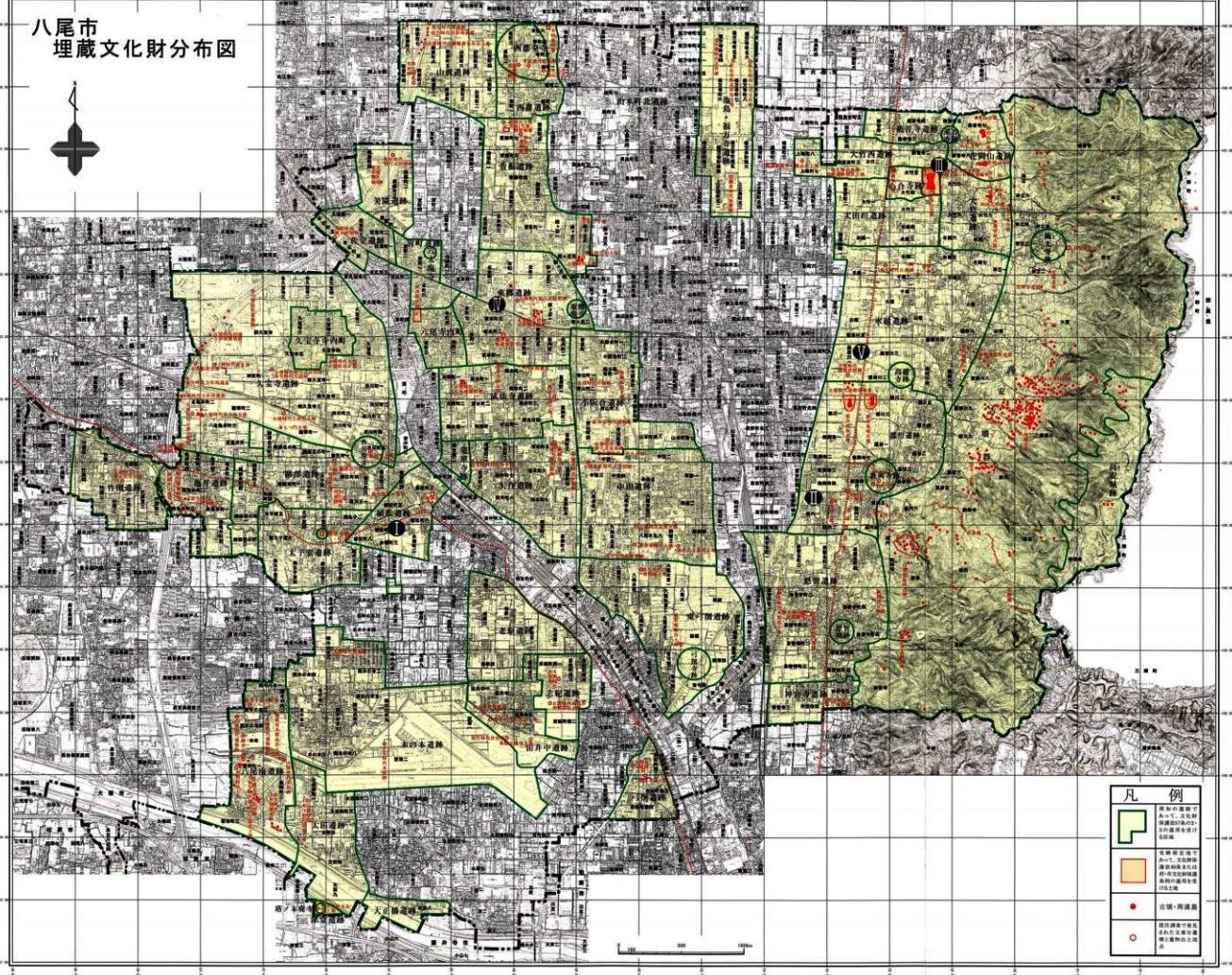
八尾市埋蔵文化財分布図

巻頭図版 心合寺山古墳第6次調査

I 植松遺跡第9次調査(UM2005-9).....	1
II 郡川遺跡第5次調査(KR2005-5).....	5
III 心合寺山古墳第6次調査(SO2006-6).....	9
IV 東郷遺跡第65次調査(TG2005-65).....	25
V 水越遺跡第9次調査(MK2006-9).....	31

報告書抄録

八尾市
埋蔵文化財分布図





4 井戸 遺物出土状況(井戸半裁時撮影 壺が上・下部にそれぞれまとまった状態で見つかった)



4 井戸 出土遺物(弥生時代後期)

I 植松遺跡第9次調査(UM2005-9)

例　　言

1. 本書は大阪府八尾市植松町七丁目136番地の1（植松公園内）で実施した防火水槽工事に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する植松遺跡第9次調査（UM2005-9）の発掘調査業務は八尾市教育委員会の指示書に基づき財團法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は、平成17年11月15日～同年11月22日（実働6日）にかけて、西村公助を担当者として実施した。調査面積は約34.9m²を測る。
1. 現地調査に参加した補助員は垣内洋平・鈴木裕治・曹 龍・中澤聰司である。
1. 内業整理は調査終了後隨時行い、平成18年12月31日に終了した。
1. 本書作成に関わる業務は以下の通りである。

【遺物実測】張 益芬

【トレース】西村

【執筆・編集】西村

本 文 目 次

第1章 はじめに	1
第2章 調査概要	1
第1節 調査の方法と経過	1
第2節 履序	3
第3節 検出遺構と出土遺物	3
1) 検出遺構	3
2) 遺構に伴わない出土遺物	3
第3章 まとめ	4

挿 図 目 次

第1図 調査地周辺図	1
第2図 調査区設定図	2
第3図 地層図	2
第4図 検出遺構平面図	2
第5図 出土遺物実測図	3

図 版 目 次

図版一 調査地周辺 調査状況 全景 S K101・102全景 S K101断面 S K102断面
北側壁面0～5層 北側壁面5・6層

第1章 はじめに

植松遺跡は、古墳時代前期から室町時代に至る複合遺跡で、地理的には、旧大和川の主流であった長瀬川の自然堤防上に位置している。当遺跡は八尾市の西部に存在しており、現在の行政区画では植松町3～8丁目、永畠町2・3丁目が遺跡の範囲である。当遺跡周辺には、北西に跡部遺跡、南西に太子堂遺跡、南に植松南遺跡、南東に老原遺跡が存在している。

当遺跡内では当調査研究会が昭和58年度以降平成14年度までに8次におよぶ発掘調査を実施している。これらの調査では、弥生時代前期～室町時代の遺構・遺物が検出されている。

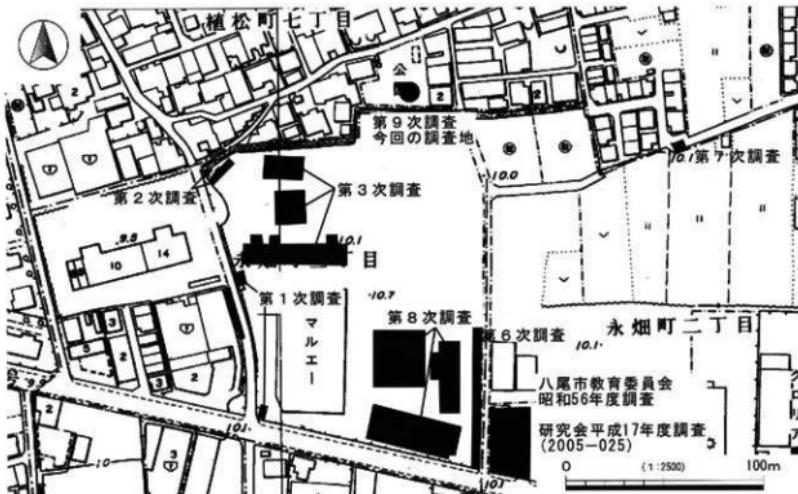
今回の調査地の南西側では研究会が平成5年度に第3次調査を実施しており、弥生時代および奈良時代の遺構を検出している。また、南側では研究会が平成14年度に第8次調査を実施しており、奈良時代から近世にかけての遺構を検出している。

第2章 調査概要

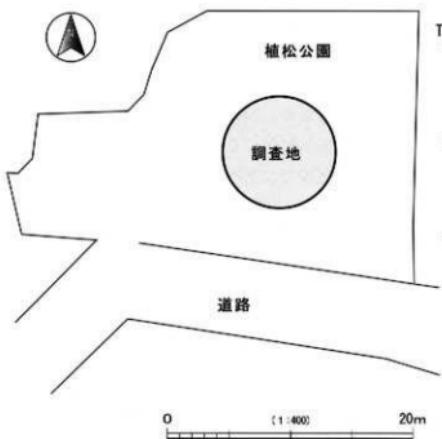
第1節 調査の方法と経過

今回の発掘調査は防火水槽工事に伴う調査で、当調査研究会が植松遺跡内で行った第9次調査にあたる。調査は水槽工事部分約34.9m²を対象に行った。

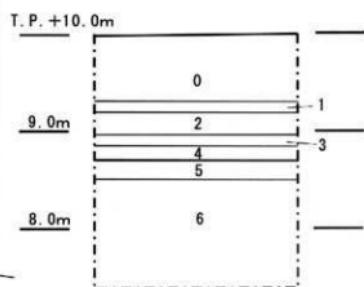
調査にあたっては、市教委の埋蔵文化財調査指示書に従い、現地表下約2.0m前後までを機械により掘削し、以下0.5mの厚みの地層は人力により掘削を実施し、遺構の検出に努める予定であった。しかし、機械で一部を現地表下2.0mまで掘削したところ、現地表下1.4～1.6mに存在する奈



第1図 調査地周辺図



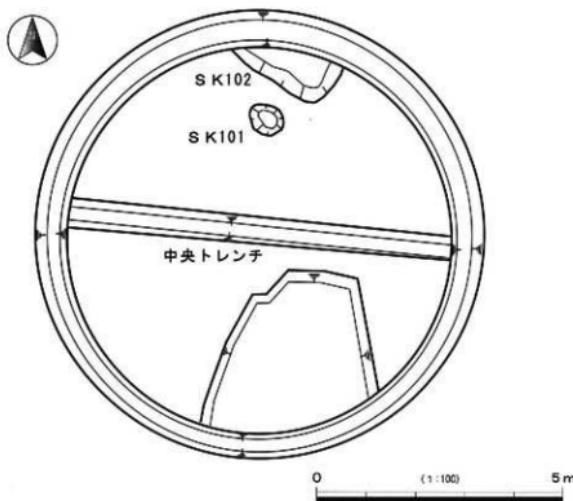
第2図 調査区設定図



0 盛土
1 N2/0黑色細粒砂混粘土 旧耕作土
2 10YR4/1褐色細粒砂混粘土
3 7.5YR5/2灰褐色細粒砂混粘土
4 10YR4/4褐色細粒砂混粘土
5 10YR4/6褐色細粒シルト質粘土
6 5Y5/1灰色細粒シルトと細粒砂のラミナ

0 (1:50) 2m

第3図 地層図



第4図 検出造構平面図

良時代の遺構を破壊してしまうことが判明した。したがって、今回の調査では、現地表下1.4mまで機械により掘削を行い、以下0.2mの厚みの地層を人力で掘削し調査を行った。調査では、八尾市作成1/2500の地図に記載している標高値(調査地の北東側道路上 T.P. +10.0m)を使用した。

第2節 層序

現地表面はT.P. +10.0m前後で、以下7層の地層の堆積を確認した。

0層は盛土。1層はK2/0黒色細粒砂混粘土の旧耕作土である。2層は10YR4/1褐色細粒砂混粘土。3層は7.5YR5/2灰褐色細粒砂混粘土、4層は10YR4/4褐色細粒砂混粘土で、鎌倉時代の瓦器が出土した。5層は10YR4/6褐色細粒シルト質粘土で、マンガン、酸化鉄を含み土壤化している。この層の上面で調査を行なった。6層は5Y5/1灰色細粒シルトと細粒砂のラミナ。厚さ0.7m以上測り、この地層は河川堆積と考えられる。

第3節 検出遺構と出土遺物

1) 検出遺構

T.P. +8.5m前後の5層上面で、奈良時代の土坑を2基(S K101・S K102)検出した。

土坑(S K)

S K101

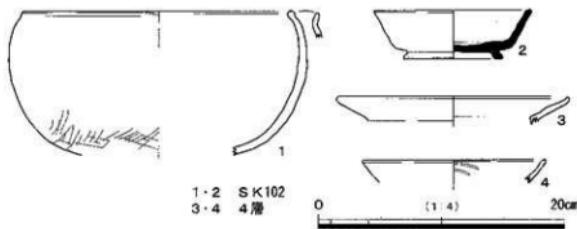
長径0.8m、短径0.5m、深さ約0.1mを測る。埋土は上から2.5YR3/6暗赤褐色粘土、10YR5/8黄褐色粘土で、土師器などの遺物が少量出土した。

S K102

長径2.3m以上、短径0.9m以上、深さ約0.15mを測る。埋土は10YR4/6褐色細粒砂混粘土で、土師器・須恵器などの遺物が少量出土した。このうち図化したものは(1・2)である。1は土師器片11鉢である。内湾する口縁部で内傾する面をもつ。口縁部内外面横ナデ。体部内面ナデ、外面下位ケズリのち粗いハケ、上位ナデを施す。2は須恵器杯身である。やや外反する口縁部で端部は丸く終わる。底部には「ハ」の字にひらく高台がつく。外面回転ナデを施す。

2) 遺構に伴わない出土遺物

4層からは古式土師器・瓦器等が出土した。このうち図化したものは(3・4)である。3は古式土師器の庄内式甕である。外反する口縁部で、端部はつまみ上げ面をもつ。内外面ヨコナデを施す。4は瓦器楕である。内湾する口縁部で端部は、丸く終わる。内面横方向のミガキ、外面ナデを施す。



第5図 出土遺物実測図

第3章 まとめ

今回の調査で検出した奈良時代墳の遺構は、南側の第3・8次調査でも検出しており、調査地付近一帯に奈良時代墳の居住域が存在していたことが判明した。奈良時代以前は今回の調査地には厚さ0.7m以上の細粒シルトと細粒砂が堆積していた。このシルトや砂は河川堆積であり、時期および規模等の詳細は不明であるが、河川が存在していたことが判明した。

参考文献

- ・高木真光 1981 「第2章 植松南遺(永畠町2丁目)」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告1980・1981年度』八尾市教育委員会
- ・高萩千秋 1993 「Ⅶ植松遺跡第1次調査(UM92-1)」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』財団法人八尾市文化財調査研究会報告39
- ・高萩千秋 1994 「Ⅺ植松遺跡(第2次調査)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告42』財団法人八尾市文化財調査研究会
- ・高萩千秋 1998 「I植松遺跡(第3次調査)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告59』財団法人八尾市文化財調査研究会
- ・西村公助 1998 「Ⅲ植松遺跡(第5次調査)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告60』財団法人八尾市文化財調査研究会
- ・原田昌則 1998 「IV植松遺跡(第6次調査)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告60』財団法人八尾市文化財調査研究会
- ・岡田清一 1999 「I植松遺跡(第4次調査)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告63』財団法人八尾市文化財調査研究会
- ・高萩千秋 2000 「IV植松遺跡(第7次調査)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告65』財団法人八尾市文化財調査研究会
- ・岡田清一 2003 「4. 植松遺跡第8次調査(UM2002-8)」『平成14年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』財団法人八尾市文化財調査研究会

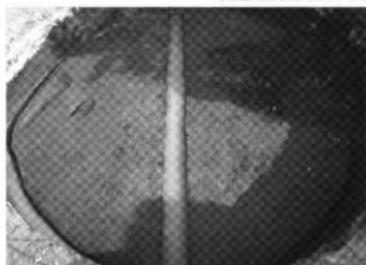
図 版



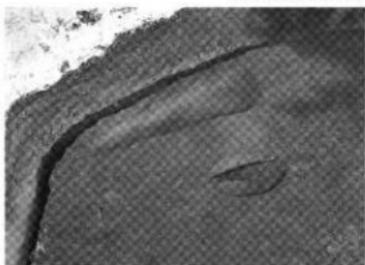
調査地周辺(北から)



調査状況(南から)



全景(西から)



SK101・102全景(南から)



SK101断面(南から)



SK102断面(南から)



北側壁面0～5層(南から)



北側壁面5・6層(南から)

II 郡川遺跡第5次調査(KR2005-5)

例　　言

1. 本書は大阪府八尾市教興寺五丁目180番地（教興寺第1公園内）で実施した防火水槽築造工事に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する郡川遺跡第5次調査（KR2005-5）の発掘調査業務は八尾市教育委員会の指示書に基づき財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は、平成17年12月14日～同年12月20日（実働5日）にかけて、西村公助を担当者として実施した。調査面積は約34.9m²を測る。
1. 現地調査に参加した補助員は市森千恵子・垣内洋平・鈴木裕治・徳谷尚子・村田知子である。
1. 内業整理は調査終了後隨時行い、平成18年12月31日に終了した。
1. 本書作成に関わる業務は以下の通りである。

【遺物実測】田島宣子

【トレース】西村

【執筆・編集】西村

本 文 目 次

第1章 はじめ	5
第2章 調査概要	5
第1節 調査の方法と経過	5
第2節 署序	7
第3節 検出遺構と出土遺物	7
1) 検出遺構	7
第3章 まとめ	7

挿 図 目 次

第1図 調査地周辺図	5
第2図 調査区設定図	6
第3図 地層図	6
第4図 検出遺構平面図	6
第5図 出土遺物実測図	7

図 版 目 次

図版一 調査地周辺 調査状況 全景 SD101全景 SD102全景 南西側壁面0～3層 南西側壁面3～9層

第1章 はじめに

郡川遺跡は、南東部に存在する古墳時代前期から室町時代に至る複合遺跡で、地理的には、国道170号線から東側の扇状地一帯に位置する。現在の行政区画では郡川1～5丁目、教興寺、教興寺1～7丁目、垣内1～5丁目、黒谷1～4丁目が遺跡の範囲である。当遺跡周辺には北に水越遺跡、南に恩智遺跡が存在している。

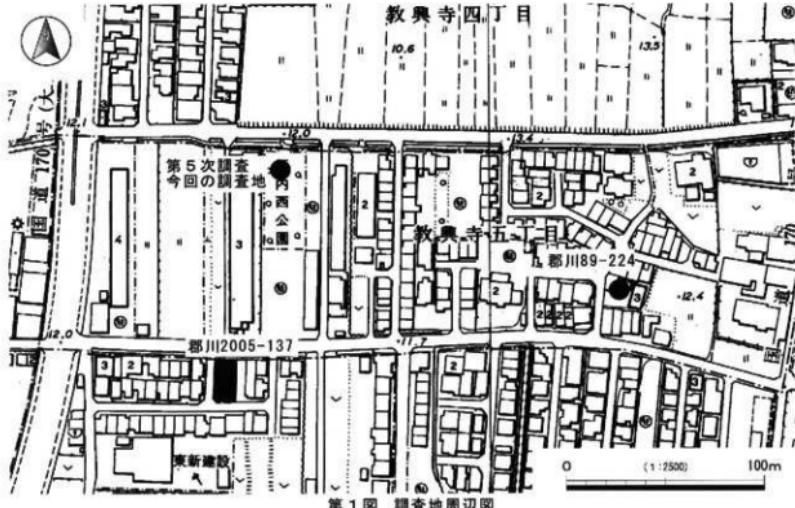
当遺跡内では八尾市教育委員会(以下市教委と記載)や八尾市文化財調査研究会(以下研究会と記載)が発掘調査を実施しており、弥生時代から近世の遺構・遺物が検出されている。今回の調査地の東側約100mでは市教委が個人住宅の建設に伴う調査を行っており、塚本塚古墳に伴う周溝と墳丘を確認している。この古墳は高さ約2.5m、直径約10mを測る円墳であることが判明した(青木1990)。

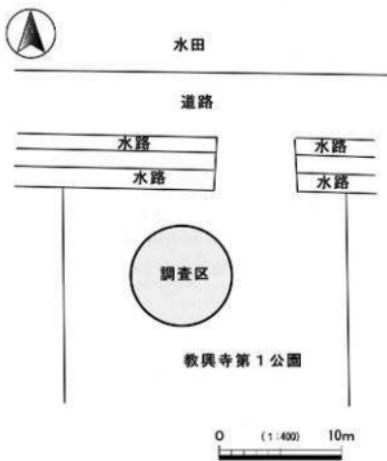
第2章 調査概要

第1節 調査の方法と経過

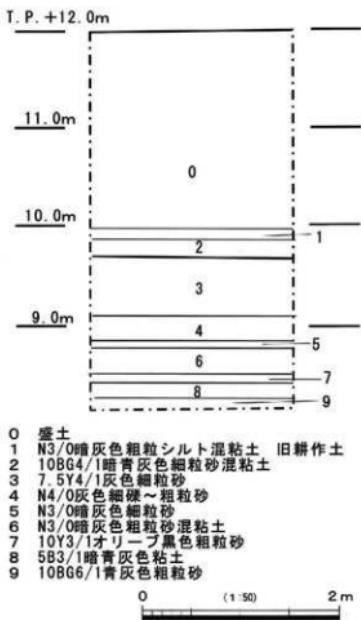
今回の発掘調査は防火水槽築造工事に伴うもので、研究会が郡川遺跡内で行った第5次調査にあたる。調査は防火水槽築造部分約34.9m³を対象に行った。

調査にあたっては、市教委の埋蔵文化財調査指示書に従い、現地表下約1.0m前後までを機械掘削し、以下0.5mの厚みの地層は人力掘削を行い、遺構の検出に努める予定であった。しかし、盛

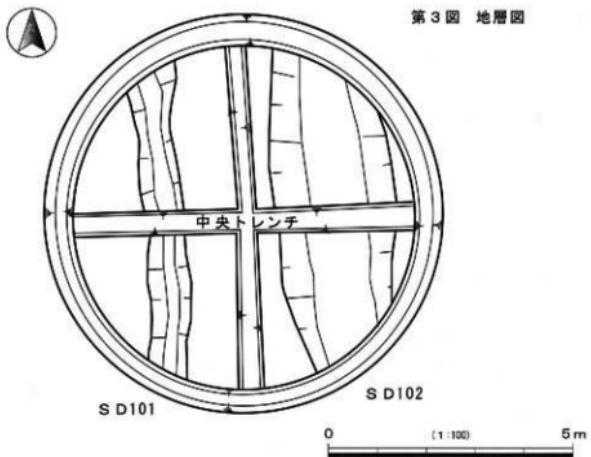




第2図 調査区設定図



第3図 地層図



第4図 検出遺構平面図

土の厚みが約2.0mあったため、この深さまで機械掘削し、以下約0.5mの厚さの地層については人力掘削を実施した。今回の調査では、八尾市作成1/2500の地図に記載している標高値(調査地の北側道路上 T.P. +12.0m)を使用した。

第2節 層序

現地表面はT.P. +12.0m前後で、以下10層の地層の堆積を確認した。

0層は盛土である。1層はN3/0暗灰色粗粒シルト混粘土の旧耕作土。2層は10BG4/1暗青灰色細粒砂混粘土で土師器などの破片を少量含む。3層は7.5Y4/1灰色細粒砂で、上面土壤化している。上面で調査を行い、鎌倉時代～室町時代の遺構を検出した。4層はN4/0灰色細粒～粗粒砂。5層はN3/0暗灰色細粒砂。6層はN3/0暗灰色粗粒砂混粘土。7層は10Y3/1オリーブ黒色粗粒砂。8層は5B3/1暗青灰色粘土。9層は10BG6/1青灰色粗粒砂で、3～9層は河川堆積である。

T.P. -9.5～-9.7mの3層上面で調査を行ない、溝を2条(SD101・102)検出した。

第3節 検出遺構と出土遺物

1) 検出遺構

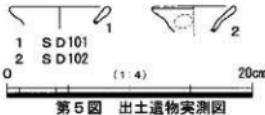
溝(SD)

SD101

調査地の西側で検出した。南北方向に伸び、幅0.8m、深さ約0.2～0.3mを測る。埋土は5BG3/1暗青灰色粗粒砂混粘土で、溝からは土師器や瓦器などの破片が少量出土した。このうち図化したものは1である。1は土師器皿で、口縁端部は丸く終わる。内外面ともにヨコナデを施す。

SD102

調査地の東側で検出した。南北方向に伸び、幅2.5m、深さ約0.3mを測る。埋土は10YR3/1黒褐色細粒砂混粘土で、溝からは土師器の小皿の破片が少量出土した。このうち図化したものは2である。2は土師器皿で、外反した後内湾きみに外上方へ伸びる口縁部。端部は丸く終わる。内外面ともにヨコナデを施す。外面全体に指痕圧痕がある。



第5図 出土遺物実測図

第3章まとめ

検出した溝(SD101・SD102)は、鎌倉時代から室町時代に相当する。耕作に伴う溝と思われ、今回の調査地は生産域であることが判明した。

3層以下9層までは厚み1.6m以上を測る砂および粘土の堆積で、河川が存在していた可能性が高いと考えられる。この河川の時期は不明である。

参考文献

- ・青木勘時 1990 「7 郡川遺跡(89-224)」『八尾市内遺跡平成元年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告20 平成元年度国庫補助事業 八尾市教育委員会
- ・原田昌則 1999 「III 郡川遺跡(第2次調査)」『財團法人八尾市文化財調査研究会報告64』財團法人八尾市文化財調査研究会報告

図 版



調査地周辺(西から)



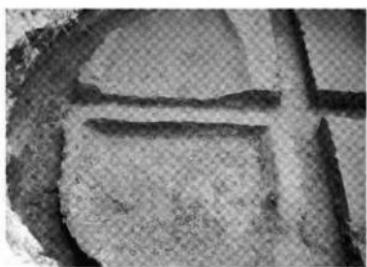
調査状況(西から)



全景(北から)



S D 101全景(北から)



S D 102 全景(北から)



南西側壁面 0～3層(北東から)



南西側壁面 3～9層(北東から)

III 心寺山古墳第6次調査(SO2006-6)

例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市大竹町5丁目2、6番の1地内で実施した市道高安第52号線道路拡幅工事に伴う調査業務等の報告書である。
1. 現地調査は平成18年9月4日～平成18年9月20日(実働10日間)にかけて、島田裕弘を調査担当者として実施した。調査面積は約93.25m²である。
1. 現地調査にあたっては、市森千恵子、青山　洋、河南智美、國津れいこ、鈴木裕治、曹　龍、鷹羽侑太、藤井孝則、藤中貴子、細谷利美の参加を得た。
1. 本書に関わる業務は、遺物実測－岩沢玲子、永井律子、中村百合、藤中、トレース－市森、島田、遺物写真撮影－垣内洋平、本書の執筆及び編集－島田が担当した。

凡　　例

1. 本書で用いた方位・座標は岡上座標第VI系(日本測地系)である。
1. 本書での遺構名は調査時のものをそのまま使用している。名称は主にその形状と性格から日本語で付した。
1. 本書で用いた挿図の縮尺は、各挿図内のスケールに示している。
1. 訂・参考文献は各章末に記した。

本　文　目　次

第1章　はじめに	9
第2章　調査の方法と経過	11
第3章　調査概要	13
第1節　基本層序	13
第2節　検出遺構と出土遺物	15
第4章　まとめ	23

挿 図 目 次

第1図 調査地周辺図.....	9
第2図 心合寺山古墳周辺図.....	11
第3図 調査区及び断面位置図.....	12
第4図 調査区断面図.....	14
第5図 第1面平面図.....	15
第6図 出土遺物実測図.....	17
第7図 1落込み断面図.....	17
第8図 4井戸平面・断面図.....	19
第9図 4井戸出土遺物実測図.....	21
第10図 心合寺山古墳墳丘復元図.....	24

表 目 次

第1表 出上遺物観察表	16
第2表 4井戸出土遺物観察表	20

図 版 目 次

図版一 調査地と心合寺山古墳 南壁断面 A区1落込み検出状況	
図版二 東壁断面 西壁断面 C区南壁2-1層瓦質土管 B区南壁3土坑断面 A区南壁1落ち込み断面 D区1落ち込み断ち割り C区南壁4井戸断面 C区4井戸最下層遺物断面	
図版三 < C区 4井戸 >	
断面 上層遺物出土状況 下層・最下層遺物出土状況	
図版四 出土遺物	
図版五 4井戸出土遺物1	
図版六 4井戸出土遺物2	

第1章 はじめに

史跡心合寺山古墳は、八尾市大竹4・5丁目に所在する前方後円墳である。墳丘本体及び周濠を形成すると見られる池と堤体が、1966年に国史跡に指定されている。

古墳は、標高26~28mの生駒山地西麓の扇状地上、西側に広く河内平野を見下す位置に立地している。墳丘長が約160mと推定される、中・北河内最大の前方後円墳である。この周辺には多くの古墳が築かれており、心合寺山古墳の東側には前代の首長墓と目される西の山古墳・花岡山古墳・向山古墳等が、西側には後代の円墳とされる鏡塚古墳が所在している。

心合寺山古墳の周辺遺跡である大竹・大竹西・太田川遺跡の調査では、溝状遺構などから弥生時代後期を中心とする遺物が多く出土しており集落の存在が指摘されている。心合寺山古墳の造成土からも弥生時代の土器が出土しており、古墳はこれらの遺跡内に立地しているとも言える。

後世に関しては寺院に関連する遺物が注目され、周辺では古くから瓦が採集されている。瓦は秦氏の氏寺である心合寺(秦興寺)由来の遺物と考えられており、その創建は7世紀中半と推定さ



第1図 調査地周辺図

れている。既往調査においても、遺構は確認されていないものの瓦類は普遍的に出土しており、寺域は、その出土量が多い古墳西側に存在したと考えられている。

心合寺山古墳の発掘調査は、八尾市教育委員会と当調査研究会によって実施してきた。

八尾市教育委員会では、史跡整備のための発掘調査を1992年度から継続的に行っており、数々の成果が得られている。墳丘構造は、正方位に則った南向きであること、西側くびれ部に作り出しを持つ3段築成であり、葺石と大規模な埴輪列を伴うことなどが明らかになっている。埴輪は、円筒・朝顔形・並形埴輪の他に、鶏形・家形・閉い形・蓋形・草摺形などの形象埴輪が出土している。埋葬施設については後円部と前方部で確認されている。後円部では同一土壌内に3基の粘土棺が確認され、鏡・勾玉・短甲・肩をはじめとする多くの副葬品が特筆される。前方部では方形段直下に木棺が確認され、部分的な調査ながらも鉄刀が副葬品として出土している。

これらの成果から心合寺山古墳は、古墳時代中期前葉に築造された、畿内における有力首長の墓と位置付けられている。武具を中心とした副葬品類から、被葬者の武人的性格が窺える。

一方、当調査研究会では、墳丘北西側の周濠にあたると考えられている「新池」を中心に調査を行ってきた。樋管・堤体の改修に伴う調査からは、新池が奈良時代～江戸時代にかけて何度も手を加えられながら次第に大規模な池となる経緯が明らかとなった。さらに、堤体から多くの瓦が出土することから、池の拡張のために心合寺に関する遺構が大きく削除されている可能性も指摘されている。

現在、心合寺山古墳は、発掘調査成果を元とした埴輪列や葺石の復元・埋葬施設の表示など、墳丘部の復元整備が完了しており、限定的ではあるが中・北河内最大の前方後円墳としての景観が復元されている。また、墳丘に隣接してガイダンス施設も建設され、「しおんじやま古墳学習館」として史跡活用に広く利用されている。

参考文献

- ・原田昌則・成海佳子 1983 「第3章 太田川遺跡発掘調査概要報告」「八尾市埋蔵文化財発掘調査概要 昭和56・57年度(財)八尾市文化財調査研究会報告3」(財)八尾市文化財調査研究会
- ・浦 奈 2001 「IV 心合寺山古墳第5次調査(SO2000-5)」「(財)八尾市文化財調査研究会報告71」(財)八尾市文化財調査研究会
- ・成海佳子 2001 「VII 心合寺山古墳第4次調査(第4次調査)」「(財)八尾市文化財調査研究会報告67」(財)八尾市文化財調査研究会
- ・吉山珠己他 2005 『史跡心合寺山古墳整備事業報告書』八尾市文化財調査報告書52』八尾市教育委員会
- ・和山晴吾 2006 『心合寺山古墳とその時代』平成18年度全国史跡整備市町村協議会－八尾大会－研修会資料

第2章 調査の方法と経過

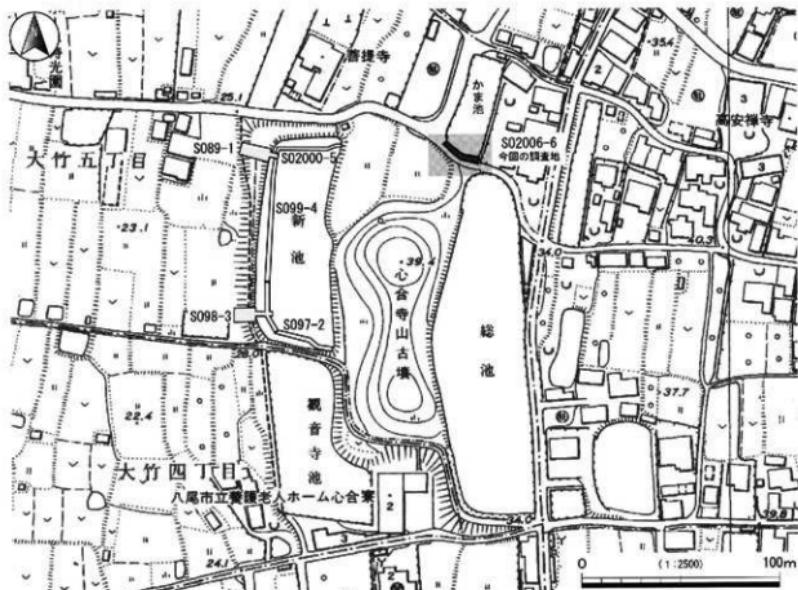
今回の調査は市道高安第52号線道路拡幅工事に伴う調査で、当調査委員会が心合寺山古墳において実施した第6次調査である。調査地は心合寺山古墳の北北東に位置する池(かま池)の南肩部にあたり、後円部墳頂から約60mの位置である。

調査対象範囲は道路拡幅に伴う池の石垣改修によって遺跡が破壊される範囲である。石垣に沿って緩やかに弧を描く調査区を3分割し、東からA・B・C区とした。また、八尾市教育委員会の指示により後に設定された、遺構範囲確認のための拡張区をD区とした。調査面積は約93.25m²。

調査は2006年9月4日に着工。着工時にはすでに石垣は撤去された状態であった。A→B→C・D区の順に調査を行い、2006年9月20日に現地調査を終了した。

測量に際しては、国土座標第VI系(旧座標：日本測地系)を使用した。座標値は平成16年度に行われた心合寺山古墳史跡境界復元時のデータを使用した。標高値は平成4年度の心合寺山古墳発掘調査時設置の4級基準点を使用した。

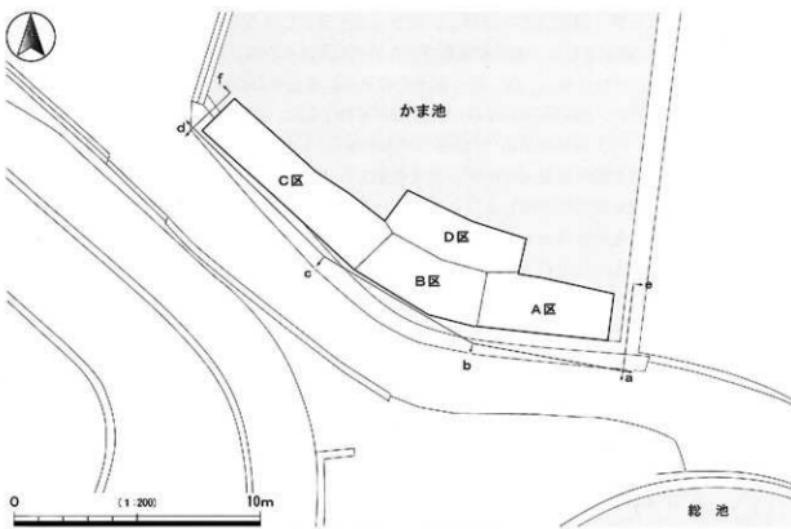
掘削は重機による機械掘削と人力掘削を併用した。現地表下1.5~2.7mを機械掘削し、遺構検出及び遺構掘削は主に人力にて行った。その後、工事深度までの掘削は遺物・遺構に注意しながら機械にて段階的に行った。本調査で検出された遺構面は+30.5m付近の1面だけである。断面観



第2図 心合寺山古墳周辺図

察からはより上位にも遺構面の存在が想定されたが、現地形が池の石垣であるために上部が極端に狭くなり、遺構面として捉えるのは必然的に不可能であった。

遺構名は、調査時に適宜「通し番号」+「遺構の種類」として遺構毎に名称を付した。遺構番号は全ての調査区に対し一連の通し番号となっている。本報告ではこの名称をそのまま使用した。



第3図 調査区及び断面位置図

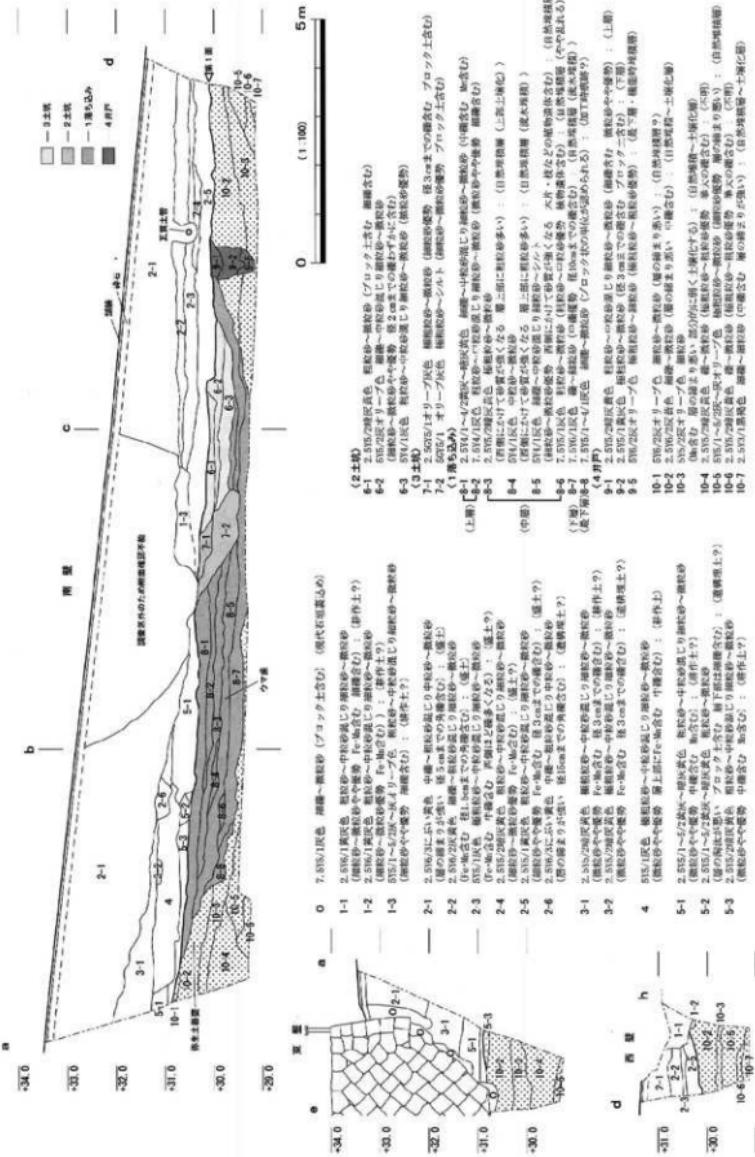
第3章 調査概要

第1節 基本層序

今回の調査において計39層の地層を確認した。各地層はその形成過程や性格によって10の単位に分類し、基本層序を作成した。同一の層序内で数層に分かれたり、後になって層が増えた場合においては、「通し番号」の後に「-」を付けて枝番号を付して層序内の関係を明らかにした。本調査では、造構埋土にも層相名を付して新旧関係を示している。これは、地層断面に対する造構埋土の占める割合が大きかったためである。また、断面観察のメインとなる南壁では、中央部が調査区外となってしまい連続した地層観察が不可能となってしまった。この中央部を挟んで地層の層相が異なり、2~5層に関しては対応関係に確証が持てない部分が残っている。

以下に各層序の概要を述べる。なお、造構埋土に関しては第2節にて解説する。

- 1層：主に西壁で確認された。1~1~1~3層に細分され、全体的に縮まりの弱い土層である。礫類の含有量も少なく均質であることから攪拌土の可能性が高いと考えられる。
- 2層：全ての調査区で確認された。径5cmまでの角礫・砂粒が多く含まれ、縮まりの強い地層である。2~1~2~5層に細分されるが、層界はかなり不明瞭である。2~1層内で瓦質土管が設置された状態で出土しており、SO89-1の成果から判断して2層上部は池の堤の盛土であると考えられる。しかし、2~3層以下は層相こそ類似しているものの、水平堆積やFe·Mnの沈着、下位の造構を切る堆積状況などの特徴から単純に盛土とは断定できず、整地層等の可能性も挙げられる。出土遺物は瓦器・須恵器・土師器細片である。
- 3層：微粒砂がやや優勢な暗灰黄色層。径3cmまでの礫が少し含まれるが、層の縮まりは強くなく、均質であることから攪拌土の可能性がある。落ち込み状に下がる3~2層は造構埋土とも考えられる。
- 4層：微粒砂がやや優勢な灰色層。層の縮まりは弱く全体的に均質で、Fe·Mnの沈着が顕著な攪拌層である。断面上では5層を大きく切り込む状況が確認できることから、大きな造構の埋土である可能性もある。
- 5層：A・B区で確認された。5~1~5~3層に細分され、層相は微粒砂がやや優勢な黄灰~暗灰黄色層。Mnの沈着がみられ攪拌土の可能性が考えられる。落ち込み状の5~2層はブロック土がみられ、造構埋土とも考えられる。出土遺物は瓦器・須恵器・土師器細片である
- 6層：3土坑埋土。
- 7層：2土坑埋土。
- 8層：1落ち込み埋土。
- 9層：4井戸埋土。
- 10層：全ての調査区で安定した堆積状況が確認された。10~1~10~7層に細分される砂礫層で、平面調査で検出された全ての造構の基盤層である。均質な細粒砂の10~1~10~5層、上部に弱い土壤化がみられる10~2~10~3~10~7層は自然堆積層と考えられる。拳大の礫を含む10~4~10~7層に関してはその性格は不明であるが、土石流による堆積物と捉えることもできる。以上の状況から10層は概ね自然堆積起源の地層と判断される。遺物は10~2層から弥生後期の甕とみられる細片が1点出土したのみである。



第4回 調査區断面図

第2節 検出遺構と出土遺物

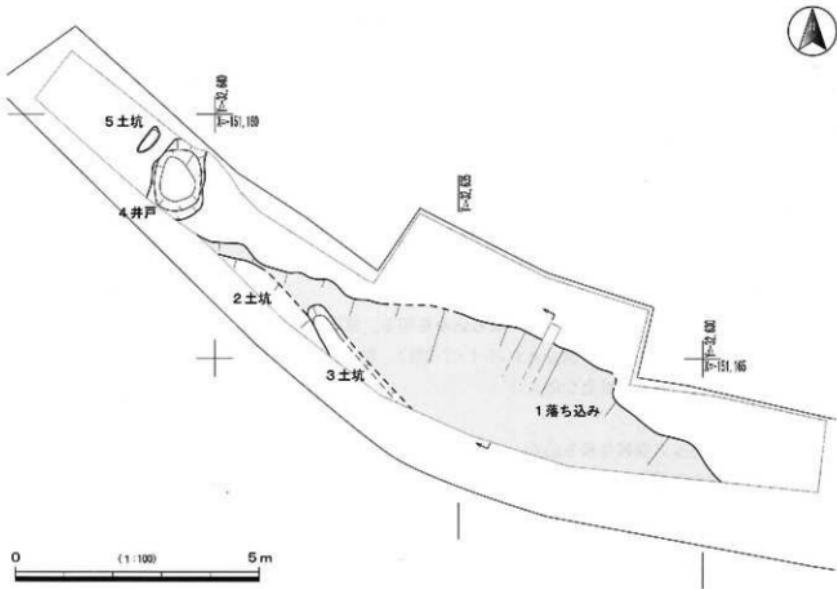
第1面

第1面は弥生時代～中世にかけての遺構面である。層序上の検出面は5層除去面となる。しかし、実際の検出面は、掘削時に既に掘り過ぎてしまつており、降雨後の復旧においてさらに掘り下げる事となつたため、本来の遺構面から20～40cm下がつたところである。時期幅のある遺構が同一面での検出される状況から、各遺構の本来の構築面は後に削剥を受けたことがわかる。その要因については、上位層の様相から考えて後世の耕作地化や池の整備等が挙げられる。

検出遺構は土坑・落ち込み・井戸である。以下、各遺構の解説を帰属時期の新しいものから順に行つう。

5 土坑

C区で検出された楕円形の土坑。深さは最大でも3cm程度であるため遺構ではない可能性も考えられる。しかし、検出面が遺構面を相当削り込んでいることから、ある程度の深さを持つ掘り込みであった可能性が高い。埋土からは薄手で精良な胎土を持つ土師器皿とみられる細片が出土しており、遺構の帰属時期は平安時代～中世以降と考えられる。



第5図 第1面平面図

第1表 土出土遺物観察表

遺物番号	器種形式	部位	法量(kg) 0 = 僕元値	成形・調整・装飾	胎土	色調	備考	出土位置
1	瓦片 陶	底部 断片	超高 1.3~ 底径 (6.2)	(外)ナデ、起り分け高台。 (内)膨大	最高 ~0.5mm までの砂粒 多く含む	NH/0灰		
2	灰窓器 灰片	口縁部 断片	口径 (12.3) 底径 2.0~	円筒ナゲ。	~0.5mmまでの 砂粒混入に穴あき	SH/0灰	B-I段階	6~10層
3	灰窓器 鉢(火口鉢)	底部	底高 4.3~ 底径 (12.3)	円筒ナゲ、ナゲ。	~1cmまでの 砂粒少しある	SH/0灰	灰窓系須恵器	1~8層
4	灰質土管	端面~側面	端面径 11.8 側面 3.9~	ナゲ。				2~4層
5	灰 土線丸瓦	内縫 16.6~ 外縫 16.4~ 厚さ 2.1	(凸)厚膜。 (凹)薄膜。 (印)有字、無字痕、 刃付強度をケズリ。		~3mmまでの 砂粒含む	SH/Y6/3に多い黄 多く含む。	須恵器 水手印 有字印 C-II	
6	瓦 瓦片	三端部	最古 22.2~ 横幅 11.4~ 厚さ 2.18	(外)側面・側面・正面面をケズリ。 (内)タクリテ。	~3mmまでの 砂粒、底面材? 多く含む	NH/0灰		
7	瓦片 陶	口縁部	口径 (13.6) 底径 4.5~	(外)腹方向に巻たみガキ。 (内)腹方向に巻たみガキ。	粗糲	(外)NH/0灰 (内)SH/0灰	地盤屋 1~3 段、傾き小角筋、 焼き並みか?	
8	瓦片 陶	口縁部 断片	口径 (14.0) 底径 3.9~	(外)に横筋コロナゲ後、横筋のミガキ。 (内)横筋のミガキ? 積重小間隙。	粗糲 ~0.5mmまでの 砂粒含む	SH/Y6/2灰白	瓦片 焼成度なし	
9	土師器 皿	口縁部	口径 (8.9) 底径 0.5~	口縁部に強いコロナゲ、底はナゲ。	粗糲 ~0.5mmまでの 砂粒含む	SH/Y6/3に多い褐	"E"の字口縁	
10	瓦 陶	口縁部 断片	口径 (14.2) 底径 3.8~	(外)口縁部コロナゲ後、横筋に巻たみガキ。 (内)横筋に波打たせタグキ、横筋に斜状凹溝。	粗糲	SH/0灰	大和型 B-A	
11	土師器 皿	口縁部 断片	口径 (15.7) 底径 4.5~	口縁部コロナゲ、底は内側に肥厚し、 上部は外側に内側する波打を成す。	~1cmまでの 砂粒少しある	HOYES/2灰白 黒灰	布紋式器	1層立ち込み 砂埋蔵
12	土の器 皿	口沿部~脚部	口径 5.5~	Hコロナゲ。口縁部は水口の頭を成す。	~1.5mmまでの 砂粒、底面含む	HOYES/3に多い黄褐色 表面に時々黒斑		

2 土坑

C区で検出された溝状の土坑。3土坑・1落ち込み埋没後に掘り込まれる。遺構は調査区外に伸びているため、その形状は不明である。埋土は3層に細分され(6-1~6-3層)、6-1層にはブロック土が認められる。埋土からは瓦器・須恵器・土師器細片が15点出土した。

3 土坑

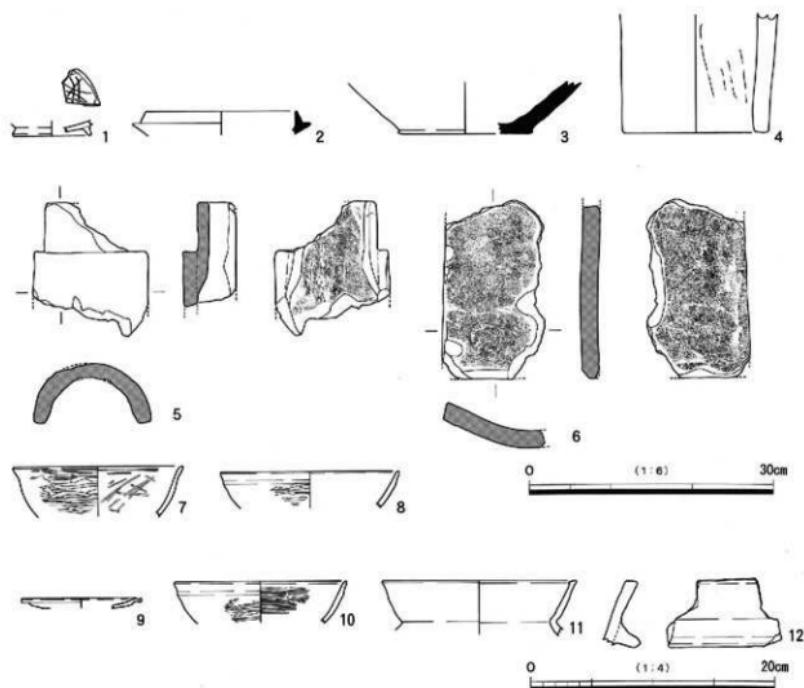
B・C区で検出された溝状土坑。1落ち込みを切る。遺構は調査区外に伸びているため、規模は不明である。埋土は2層に細分され(7-1・7-2層)、共にブロック土が顕著である。埋土からは瓦器・土師器細片が6点出土した。

1 落ち込み

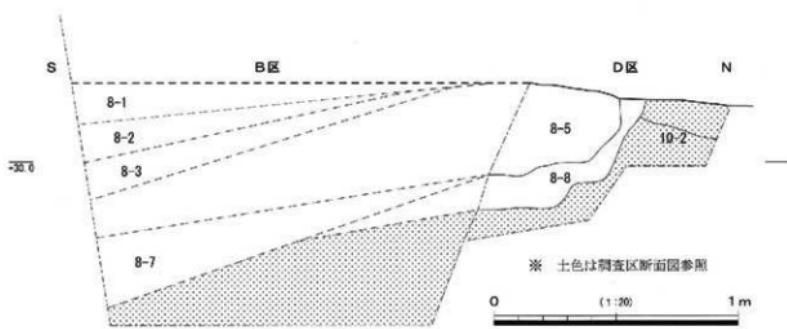
全調査区に跨る大規模な落ち込み。4井戸埋没後に形成される。遺構の平面形状は確認される限りでは緩やかな円弧を呈する。規模については調査区外に伸びているため不明であるが、かなりの大きさを持つものと思われる。埋土は上層(8-1・8-2層)、中層(8-3~8-6層)、下層(8-7層)、最下層(8-8層)の4単位8層に細分される。

上 層：粘質がやや強い砂混じり土、礫が少し含まれる。暗色が強いのは土壌化の影響とみられる、性格は不明であるが自然堆積の要素は確認できない。

中 層：落ち込みの肩近くでは粘質が強い砂混じり土であるものが、中央に向かうにつれて砂の比率が高くなり、同一層内でも様相が異なる。中層は、8-5層内に含まれる木片や小枝な



第6図 出土遺物実測図



第7図 1落ち込み断面図

どの植物遺体や中央部の均質は砂から考えて、自然起源の堆積層と捉えられる。出土遺物は瓦器・瓦・須恵器・土師器である。8-5層からはウマの歯が出土した。

下層：灰色の砂礫層。中礫～細礫が主体の自然堆積層で、計10cm程度の礫も相当含まれる。出土遺物は瓦器・瓦・須恵器・土師器である。

最下層：ブロック土が認められる、灰色の礫混じり土。落ち込み掘削時の加工痕跡とも考えられる。遺物の出土はなかった。

断面観察から造構の性格を考えると、中層・下層の堆積状況から流水状態が想定され、特に下層に堆積する砂礫層はその流れの激しさを示している。よって、1落ち込みは溝として機能していたと考えられる。また、上方にかけての細粒化傾向からは、廃絶に向かうにつれて次第に流水量が減少した状況が窺われる。上層にみられる土壤化は、廃絶に際しては湿地状態であったことを示すとも考えられる。ただ、これより上部は5層に切られているため地層が残存しておらず、本来の廃絶状況は判然としない。しかし、確認しうる限りでは人為的に埋め戻した痕跡は確認できず、自然廃絶と考えられる。

1落ち込みからは細片ながら比較的多くの遺物が出土した。時期は平安時代後期～鎌倉時代にかけてのものが大半で、上師器羽釜の多さが特筆される。その中で、12世紀中半に比定される瓦器椀(10)が機能層である下層から出土しており、器表の摩滅の少なさから溝の機能時期を示す有力な遺物と考えられる。また、特筆すべき遺物として玉縁丸瓦(5)が挙げられる。重厚な作りや玉縁部の接合法から帰属時期は7cにまで遡る可能性があり、心合寺創建時の瓦の可能性がある。その他に特殊な遺物として、8-5層からウマの上顎歯が出土している。1箇所からまとまって出土しており、原形を保っていたものは15本(切歯5・臼歯10)である。出土位置は南壁断面上であったため、平面的な調査を行はずそのままの出土状況を確認することはできなかった。ただし、取り上げ時に白歯が並んでいる状況を確認しており、付近からは切歯も出土していることから、元は頭蓋骨の状態で造構内に入っていたと考えられ、歯は元位置を保っていると考えられる。ウマは犬歯が確認できないことから雌の可能性が高く。白歯の歯冠高から6才くらいと推定される。

4 井戸

C区で検出された素掘りの井戸。平面形状は南北に長軸を持つ楕円形で、その端は一部調査区外に至る。検出規模は南北1.7m以上、東西1.1m、深さ0.78mである。井戸の掘り込みは均質な砂層である10-3層まで達しており、現在でも湧水が確認される。また、南壁断面上では1落ち込みに切られる状況が確認でき、本調査中で層位的な点において最も古い造構となる。埋土は、上層(9-1層)、下層(9-2・9-3層)、遺物内土(9-4層)、最下層(9-5層)の4単位5層に細分される。

上層：暗灰黄色の砂混じり土。微粒砂優勢で細礫を少し含む。自然堆積を示す要素は確認できず、埋め戻し土の可能性が高い。出土遺物は弥生土器底部破片(22)・完形の壺が3個体(13・14・15)である。

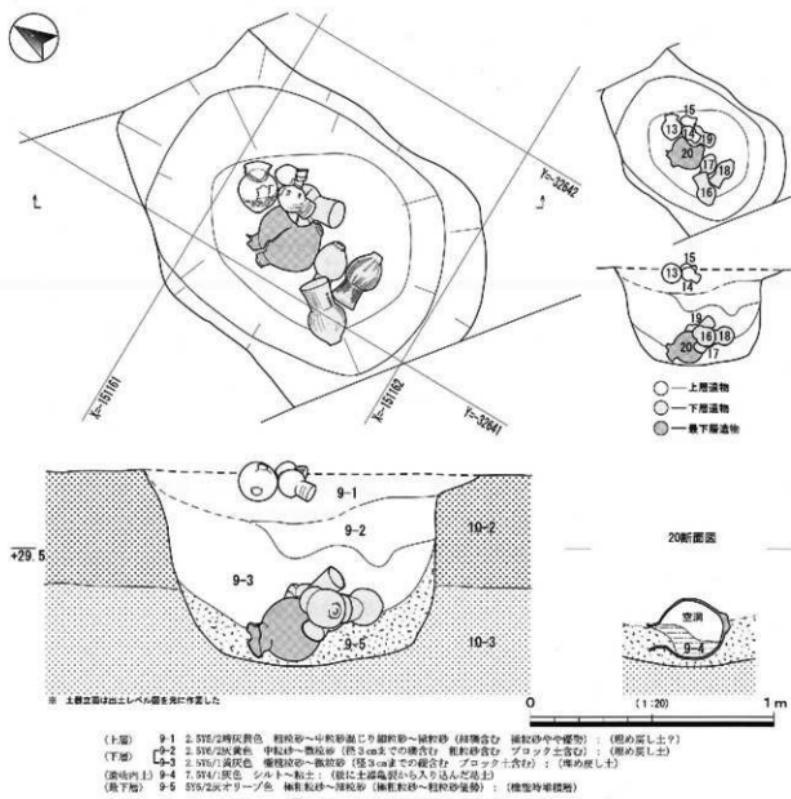
下層：灰黄～黃灰色の極粗粒砂～微粒砂。層は均質ではなく、極粗粒砂の分布には偏りが見られ、径3cmまでの礫が含まれる。部分的に微粒砂ブロック土が確認できることから、埋め戻し土と考えられる。9-2層からは弥生土器高杯脚柱部(21)の他に破片が数点、9-3層からは完形の弥生土器長頸壺が4個体(16・17・18・19)出土した。

遺物内土：遺物内で確認された均質な粘土層。遺物の亀裂から水分と共に流れ込んだ粘土が空洞

部分に堆積したものと考えられる。したがって、井戸埋め戻し後の形成層である。
最下層：灰オリーブ色の極粗粒砂～細粒砂、機能時堆積層である。層の締まりは悪く、10・2層
が起源と考えられる粗粒砂が主体である。井戸使用時に壁面から落ち込んだ砂が堆積
して形成された層と捉えられる。出土遺物は完形の弥生土器広口壺(20)である。

井戸からは弥生時代後期後半に比定される壺が完形で計8個体出土していることが特筆される。
遺物は出土層位から3グループに分類でき、上・下層出土遺物(13～19)はその出土状況から考
えて井戸廃棄に伴う埋め戻しに際しての供獻遺物と考えられる。各遺物の詳細については第2表に
まとめた。

上層遺物である13・14・15は、井戸の中央部に寄り添うように寝かせた状態で出土しており、
出土標高もほぼ同じであることからも意図的な埋置を想起させる。遺物内の土砂の堆積過程には
共通点が認められる。まず、口から流れ込んできた上層が半分程度堆積する。次に、埋土によっ



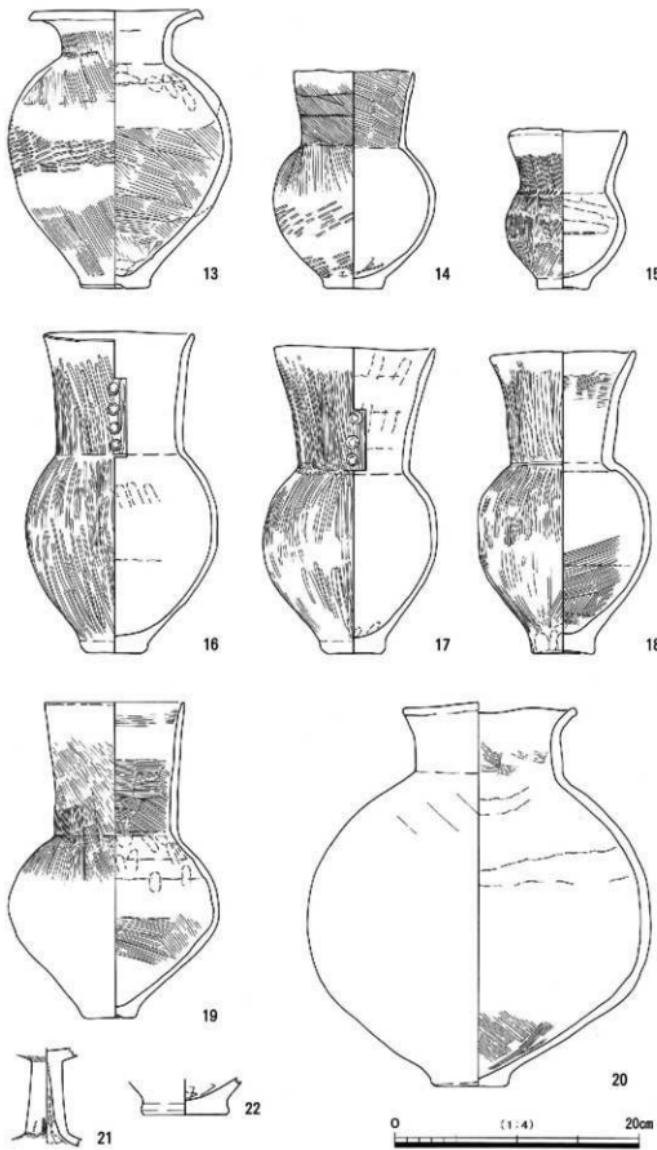
第8図 4井戸平面図・断面図

第2表 4井戸出土遺物観察表

遺物番号	器種型式	部位	法算(㎝) ○=復元値	成形・調整・装飾	胎土	色調	備考	出土位置
13	陶生土器 底口壺	全体	口径(13.1) 高さ(12.9) 腹径(10.4) 底径(10.3) 高さ(4.0)	(内)側面下部に上からハケ(6.6/㎝)。側面裏面は底面 テクスチャ後、ナデ、底面は土台がリカバ(6.6/㎝)。側面 は底面(6.6/㎝)、側面裏面(6.6/㎝)。側面側面は底面 (6.6/㎝)、底面(6.6/㎝)。側面裏面は底面(6.6/㎝)。 側面下部・底面・底面裏面は底面(6.6/㎝)。	~1cmまでの胎土 表面は底面も 底面もナデ	(外)2.3/7.2~10/9.4 底面(6.6/㎝)2.3/6.2(6.6/㎝) ~10/8.6(6.6/㎝)	丸削り	
14	陶生土器 表裏面	全体	口径 9.6 高さ 17.7 腹径 13.0 底径 7.8 厚さ 2.2 底径 4.0	(内)側面下部に上からハケ(6.6/㎝)。側面裏面は底面(6.6/㎝) ナデ、底面(6.6/㎝)。側面裏面は底面(6.6/㎝)。側面 は底面(6.6/㎝)。側面裏面(6.6/㎝)。側面側面は底面 (6.6/㎝)、底面(6.6/㎝)。	~2cmまでの胎土 表面は底面も 底面もナデ	(外)10/8.6(6.6/㎝)2.3/6.2(6.6/㎝) ~10/8.6(6.6/㎝)2.3/6.2(6.6/㎝)	丸削り	4井戸 上層
15	陶生土器 表裏面	全体	口径 9.3 高さ 13.0 腹径 7.8 厚さ 2.2 底径 4.0	(内)側面下部に上からハケ(6.6/㎝)。側面裏面は底面 (6.6/㎝)。側面裏面は底面(6.6/㎝)。側面側面は底面 (6.6/㎝)。側面裏面(6.6/㎝)。側面側面は底面 (6.6/㎝)。	~0.5cmまでの胎土 表面は底面も 底面もナデ	2.3/6.2(6.6/㎝)	丸削り	
16	陶生土器 表裏面	全体	口径 12.1 高さ 26.7 腹径 18.7 厚さ 2.7 底径 4.2 高さ(4.7)	(内)側面下部に上からハケ(6.6/㎝)。側面裏面は底面 (6.6/㎝)。側面裏面は底面(6.6/㎝)。側面側面は底面 (6.6/㎝)。側面裏面(6.6/㎝)。側面側面は底面 (6.6/㎝)。	~3.5cmまでの胎土 表面は底面も 底面もナデ	(外)7.3/8.6(6.6/㎝)2.3/6.2(6.6/㎝) (内)9/10.6(6.6/㎝)2.3/6.2(6.6/㎝)	丸削り	
17	陶生土器 表裏面	全体	口径 13.2 高さ 26.7 腹径 19.3 厚さ 2.7 底径 4.3 高さ(4.7)	(内)側面・底面はナゲ後、底面のミガキ。口縁部はナゲ後、 ヨコナデ。ヨコナデは口縁部(6.6/㎝)、側面の範囲で行われる。底面 は世帯による泡吹きが複数回(4つ)。(外)底面に底面。底 面は側面(6.6/㎝)。側面・底面はヨコナデ。底面・口縁部はナゲ後、 ヨコナデ。	~3cmまでの胎土 表面は底面も 底面もナゲ	(外)7.3/8.6(6.6/㎝)2.3/6.2(6.6/㎝) (内)9/10.6(6.6/㎝)2.3/6.2(6.6/㎝)	丸削り	
18	陶生土器 表裏面	全体	口径 11.5 高さ 24.9 腹径 18.0 厚さ 2.6 底径 4.9	(内)底面は粗面質。側面・底面はナゲ後、ヨコナデ。口縁部はナゲ後、 ヨコナデ。底面(6.6/㎝)。側面(6.6/㎝)。底面(6.6/㎝)。側面(6.6/㎝)。 側面裏面は底面(6.6/㎝)。	~3cmまでの胎土 表面は底面も 底面もナゲ	(外)8/9.5(6.6/㎝)2.3/6.2(6.6/㎝) (内)10/10.5(6.6/㎝)2.3/6.2(6.6/㎝)	丸削り	4井戸 下層
19	陶生土器 表裏面	全体	口径 11.5 高さ 25.9 腹径 18.0 厚さ 2.6 底径 4.9	(内)側面下部はナゲ。側面・底面は粗面(6.6/㎝)。底面(6.6/㎝)。側面(6.6/㎝)。 側面(6.6/㎝)。底面(6.6/㎝)。側面(6.6/㎝)。底面(6.6/㎝)。側面(6.6/㎝)。	~2cmまでの胎土 表面は底面も 底面もナゲ	(外)7.3/8.6(6.6/㎝)2.3/6.2(6.6/㎝) (内)10/10.5(6.6/㎝)2.3/6.2(6.6/㎝)	丸削り	
20	陶生土器 底口壺	全体	口径 13.8 高さ 31.5 腹径 24.9 厚さ 2.6 底径 5.8	(内)肩部・口縁部はナゲ。側面・底面はナゲ(6.6/㎝)。側面 下部は底面(6.6/㎝)。側面裏面(6.6/㎝)。側面(6.6/㎝)。 側面(6.6/㎝)。底面(6.6/㎝)。側面(6.6/㎝)。底面(6.6/㎝)。側面(6.6/㎝)。 側面(6.6/㎝)。底面(6.6/㎝)。側面(6.6/㎝)。底面(6.6/㎝)。	~3cmまでの胎土 表面は底面も 底面もナゲ	(外)2.3/5.5(6.6/㎝) 底面(6.6/㎝)1.1(6.6/㎝)	丸削り	4井戸 下層
21	陶生土器 表裏面	全体	高さ 7.5~8.0	(内)側面(6.6/㎝)。側面裏面(6.6/㎝)。側面(6.6/㎝)。底面(6.6/㎝)。	~2cmまでの胎土 表面は底面も 底面もナゲ	(外)2.3/2.3(6.6/㎝)2.3/6.2(6.6/㎝) (内)0.9/1.1(6.6/㎝)	4井戸 中層	
22	陶生土器 底	底面	高さ 5.0~6.0	(内)豊富。ヨコナデ。	~2cmまでの 胎土	(外)7.3/8.6(6.6/㎝) (内)10/10.5(6.6/㎝)	4井戸 上層	

て口が塞がりきらない個体は、その上部に数cmの粘土層が形成される。最後に、口が塞がった時点での粘土の侵入が止まり、残りは空洞部となる。この空洞部は出土状況に対して常に上部に確認されることから、出土状況が埋置状況をそのまま示すといえる。13・15は検出時には割れた状態であったが、遺物内に空洞部が残っていたことを考えると構造検出中に割ってしまった可能性が高く、元は完形であったと考えられる。これら上層遺物は、纏まって並べられている状況から判断して井戸に伴う供献遺物と考えられる。

下層遺物である16・17・18・19の出土状況は、上層遺物と比較するとその配置・傾き共にばらつきがあり、16・17の上器同士の重なりなど上下関係も認められる。しかし、長頸壺のみがしかも完形で出土する状況は偶然とは考えにくく、表面調整がよく残っていることからも長期間の使用品ではない可能性が高い。よって、意図的な井戸への供献遺物と考えるのが妥当であろう。土器内の上砂の堆積過程は基本的に上層遺物と同様で、下層の流れ込みとその後の粘土層の堆積が



第9図 4井戸出土遺物実測図

認められる。土器内の空洞位置から判断して元位置を保っているとみて間違いない。下層遺物の出土位置が上層遺物と比較して散雜なことは、水が溝えられた井戸へ供された壺が底に沈んでいく過程で分散した結果とも考えることもでき、意図的な配置ではない可能性が高いと考える。そして、遺物の供献時期は、各個体とも埋土下層の最下部に纏まっていること、埋め戻し土(9-3層)が中途半端に遺物内に流入している状況から判断して、井戸埋め戻しの直前もしくは埋め戻し初段階と判断される。

最下層遺物は上・下層遺物とは異なる性格を持つ可能性がある。最下層から出土した20は、井戸内で最も古い遺物である。井戸埋め戻し時には既に井戸底に存在していたことは確実であり、さらに、最下層に半分程度しか埋もれていないことから判断して、井戸埋め戻しの少し前に位置が固定された可能性が高い。遺物内には、流れ込んできた最下層によって完全に口が塞がれた後にも内部に粘土の堆積が進んでいる。これは上器の上部にある亀裂のために、水と共に粘土が流れ込んできたことを示している。そして、上器は長年の土圧のために歪みが生じており、接合復元に際してこの亀裂付近はどうしても隙間が生じてしまう結果となった。最下層遺物は完形であることから上・下層の完形遺物と同じく供献遺物である可能性もある。しかし、器表の磨耗を長期間の使用の結果を示すものを捉え、取水具として使用されていた壺が井戸の廃棄に際して底に残った可能性を考えたい。

井戸への供献遺物と考えられる完形土器群は、全て弥生時代後期後半にその時期を求めることができるが、上層遺物(13・14・15)と下層遺物(16・17・18・19)とを比較してみると少なからず差異が認められる。まず、器形に関して上層遺物は小形化・短頸化の傾向にある。次に、調整に関しては、上層遺物はハケが主体で部分的にタキ目が残るのに対して、下層遺物はミガキが主体である。器種に関しては上層遺物にのみ広口壺が含まれる。以上のことから、上層遺物はより新しい様相であるといえ、下層遺物との時期差が想定される。この所見から井戸への供献行為が2度行われたと推定されるが、一度埋め戻された井戸が再び掘られたものなのか、初回の供献時に井戸を全て埋めてしまわずに穴として残したものに再度供献が行われたものかを判断することはできず、井戸廃棄の具体的な様相は不明に終わった。

参考文献

- ・藤井寺市教育委員会 1987 「藤井寺市及びその周辺の古代寺院(上) 藤井寺の遺跡ガイドブック No.2」
- ・寺沢 薫・森岡秀人 1989 「弥生上器の様式と編年-近畿編I-」木耳社
- ・中村 浩 1980 「第6章 和泉陶邑窯出土遺物の時期編年」『陶邑III 大阪府文化財調査報告書 第30輯』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター
- ・大脇 遼 1991 「研究ノート 丸瓦の製作技術」『研究論集IX 奈良国立文化財研究所学報 第49冊』奈良国立文化財研究所
- ・中世土器研究会 1995 「概説 中世の土器・陶磁器」
- ・奈良文化財研究所埋蔵文化財センター 2004 「環境考古学4 牛馬骨格図譜」『埋蔵文化財ニュース115』奈良文化財研究所埋蔵文化財センター

第4章 まとめ

今回の調査は、池の現存石垣改修に伴う部分的な調査である。そのため確認不能部分が多く不明な点が多く残った。池の起源も不明なままに終わったが、既往調査と2-1層出土の樋管とみられる瓦質土管から考えて、18世紀以降になるものと推測される。一方、下層部では遺構面を捉えることができ、弥生時代後期から中世にかけての遺構・遺物など多くの成果を得ることができた。

弥生時代後期の4井戸からは、井戸廃棄時の供獻品とみられる壺群が当時のままの状況で出土した。これらの遺物は良好な一括資料である点、井戸本体と合わせて考えると当時の集落の存在を示唆する点において大きな成果といえる。調査地の北東約120mの地点での大竹跡発掘調査第10地点で検出された溝状遺構からは、今回の出土品と共に持つ長頸壺や広口壺が多量に出土している。

全調査区に跨って検出された1落ち込みはその全容は不明なもの、少なくとも平安時代後期に流水状態にある溝であったことが明らかとなった。出土遺物には5・6などの古代瓦がみられ、心合寺山古墳の南西側に存在したとされる心合寺との関連を思わせる。そして、ウマの頭蓋骨はこの溝において祭祀行為があったことを想像させる。

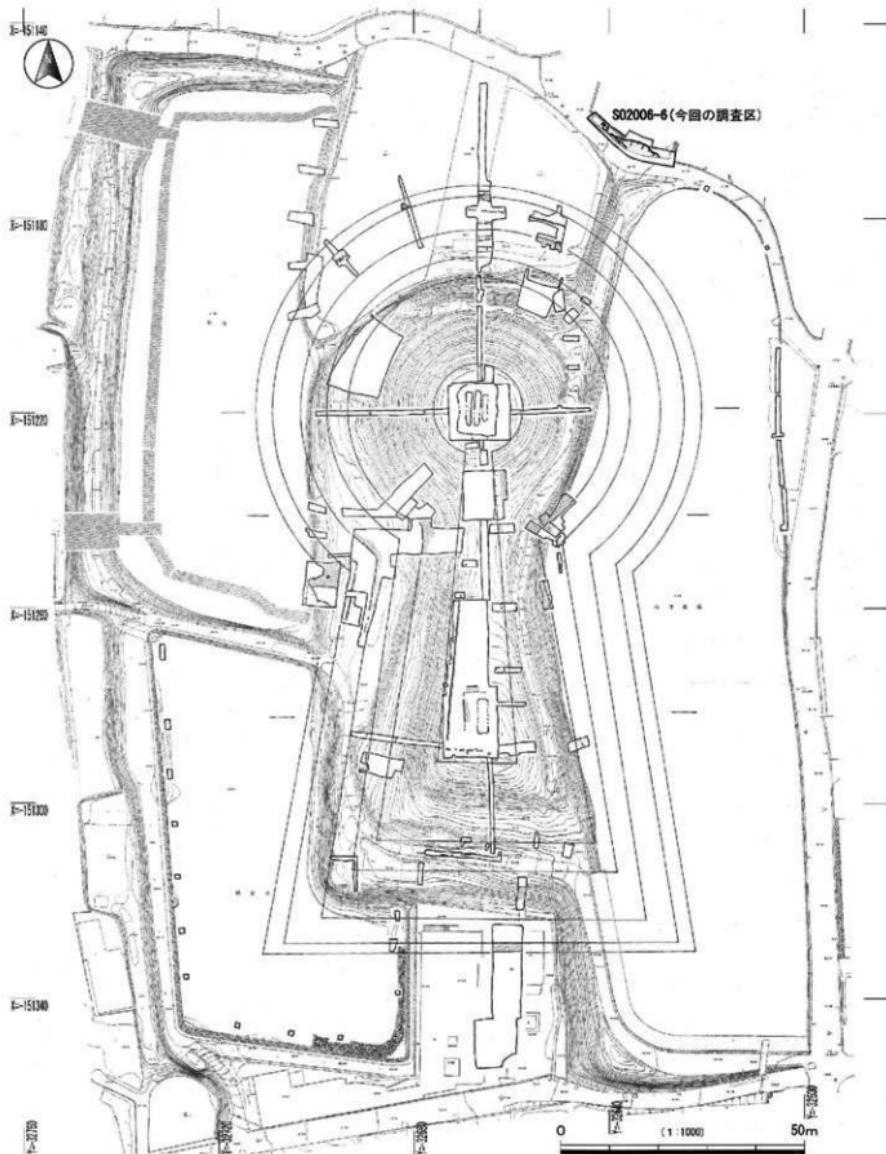
一方、調査名にもなっている心合寺山古墳に関しての成果は乏しく、出土遺物中に明確な埴輪は確認できなかった。しかし、1落ち込みが心合寺山古墳後円部に沿ったカーブを描いていることから、古くは周濠であった可能性を考えてみたい。もちろん、調査所見から導かれる事実は、あくまで平安時代後期に機能していた溝であり、古墳時代の遺物も若干含まれるもの、そこには古い時代の堆積層は認められない。しかし、下層埋土である砂礫層の状況から、溝の機能時はかなりの流れであったと推測され、周濠であった時代の堆積物が後世の流れによって削られてしまったか、あるいは、後の改変を受けて掘り直された可能性も否定できない。いずれにせよ、1落ち込みは後円部に沿った形状であることは間違いない。元来、周濠は滯水状態にあったと考えるのが妥当であり、時間の経過と共にある程度埋没が進んでいた筈である。しかし、後世に溝を掘ったのならば、埋まりきっていない周濠を利用していても不思議はないだろう。

以上の推察は、その根拠となる遺物や遺構が確認できない現段階ではあくまで仮定的話でしかなく、当然のことながら既往調査においても北側周濠については不明であり、その存在すら明らかになっていない。八尾市教育委員会による後円部北側におけるトレンチ調査では、平安時代後期～鎌倉時代の遺物を含む周濠状痕跡とされる遺構が確認されている。ここからは埴輪は全く出土しておらず、後世の土地改変の可能性が指摘されている。これは、本調査における1落ち込みと同じ状況であり、2者は同一の遺構の可能性が高いと考える。

墳丘北側の様相の解明は今後の調査における大きな課題といえよう。

参考文献

- ・村川行広・瀬川芳樹他 1980 「河内 大竹跡一八尾市水道局低区第3配水池送配水管敷設用地内埋蔵文化財発掘調査報告」 八尾市教育委員会
- ・成海佳子 1990 「19.心合寺山古墳(SO89-1)」「八尾市文化財調査研究会年報 平成元年度 (財)八尾市文化財調査研究会報告28」 (財)八尾市文化財調査研究会
- ・吉田野々 1996 「史跡 心合寺山古墳基礎発掘調査報告書 八尾市文化財調査報告35 史跡整備事業調査報告1」 八尾市教育委員会



第10図 心合寺山古墳 墳丘復元図

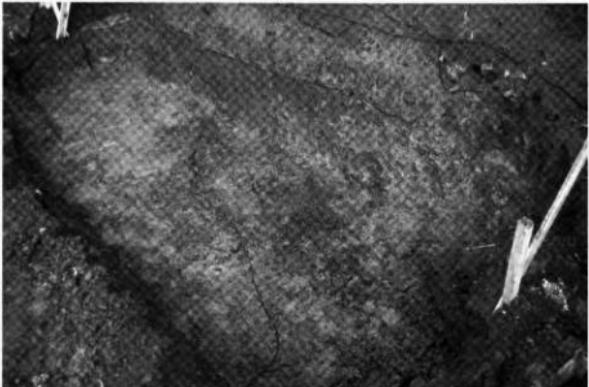
図 版



調査地と心合寺山古墳
(北から)



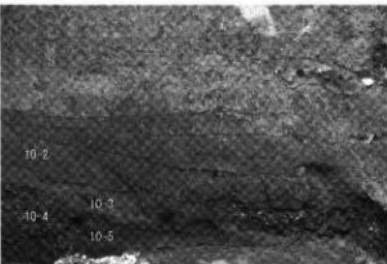
南壁断面
(北西から)



A区 1落ち込み検出状況
(北西から)



東壁断面(西から)



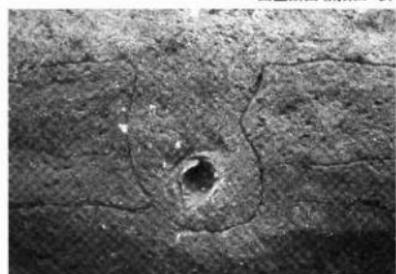
A区 南壁 1落ち込み断面(北から)



西壁断面(南東から)



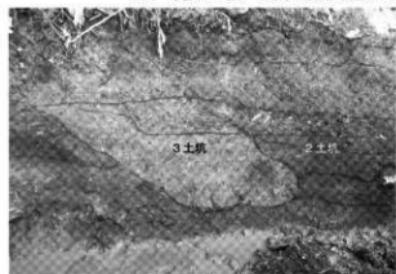
D区 1落ち込み断ち割り(南から)



C区 南壁2-1層 瓦質土管(北東から)



C区 南壁 4井戸断面(北東から)



B区 南壁 3土坑断面(北東から)



C区 4井戸 最下層遺物(20)断面



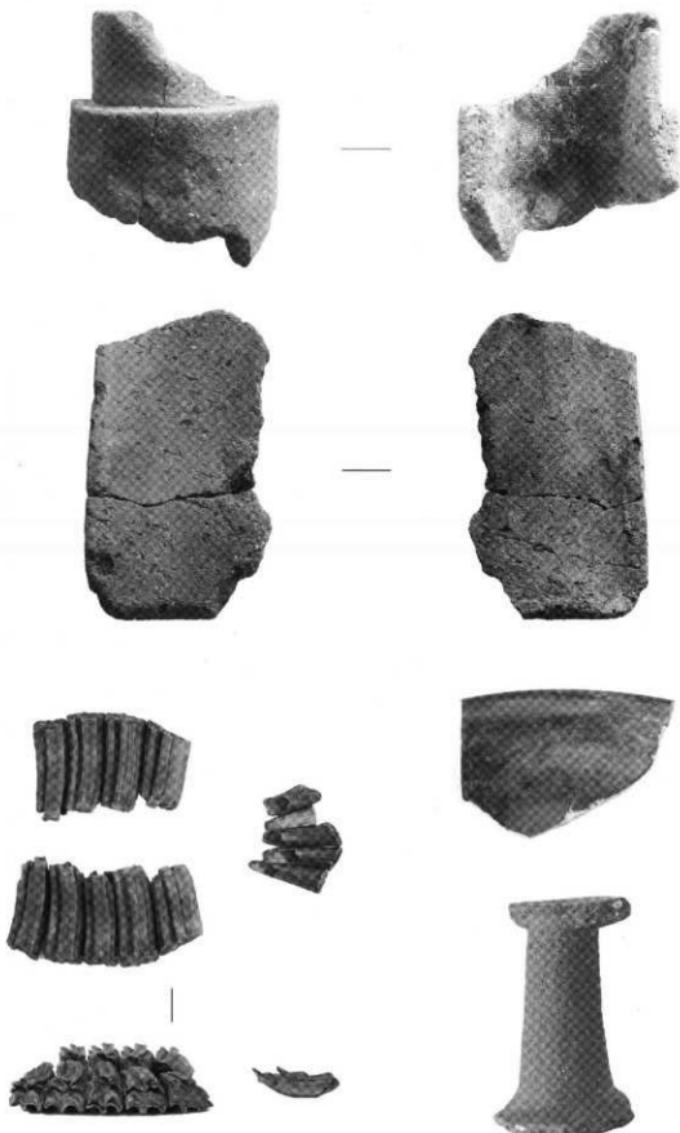
C区 4井戸 断面
(南西から)



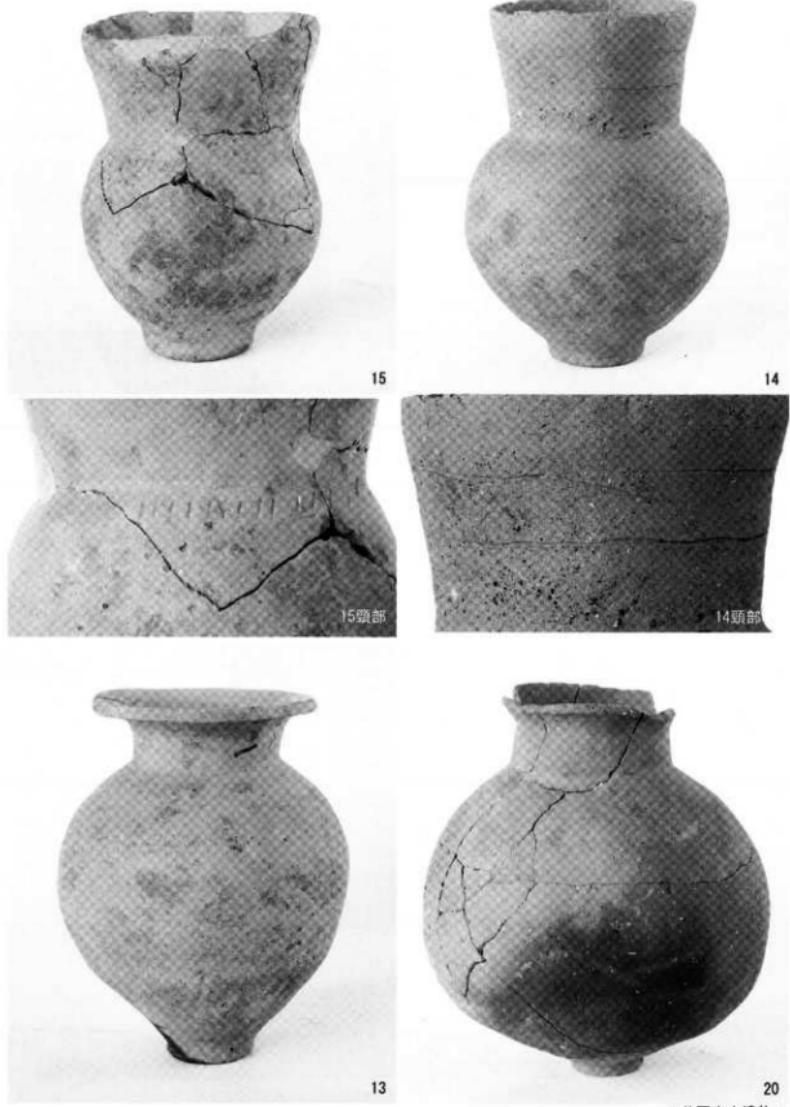
C区
4井戸上層遺物出土状況
(近接・西から)



C区
4井戸下層・最下層
遺物出土状況
(近接・北東から)



8-5層出土 ウマ上顎歯



20
4井戸出土遺物 1



16



18



17



19

IV 東鄉遺跡第 65 次調查(T G 2005-65)

例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市光町1丁目地内で実施したエレベーター設置工事に伴う発掘調査報告書である。
1. 本書で報告する東郷遺跡第65次調査（TG2005-65）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は、平成18年1月26日から1月27日（実働2日）にかけて、荒川和哉を調査担当者として実施した。調査面積は9.59m²である。
1. 現地調査においては、鈴木裕治・曹　龍の参加を得た。
1. 整理業務は、現地調査終了後、隨時実施し、平成19年2月28日に完了した。
1. 本書作成に関わる内業整理業務は、遺物実測－鈴木、図面レイアウト・遺構図面トレース－荒川、遺物図面トレース－山内千恵子、遺物写真撮影－山名康子が行い、他に青山　洋の協力を得た。
1. 本書の執筆・構成は、荒川が行った。

本　文　目　次

第1章　はじめに	25
第2章　調査概要	26
第1節　調査の方法と経過	26
第2節　眉序	27
第3節　検出遺構と出土遺物	27
第3章　まとめ	29

挿 図 目 次

第1図 調査地周辺図.....	25
第2図 調査区位置図.....	26
第3図 東壁断面および検出遺構平面・断面図.....	28
第4図 落込み02出土遺物実測図.....	29

写 真 目 次

写真1 落込み02出土遺物	29
---------------------	----

図 版 目 次

図版一 東壁地層断面	
遺構検出面全景	
落込み01・落込み02埋土断面	

第1章 はじめに

東郷遺跡は、八尾市の中央部の北西寄りに位置する近畿日本鉄道大阪線八尾駅(以下、近鉄八尾駅とする)周辺の東西約1.2km、南北約1.0kmの範囲に所在する弥生時代中期以降の複合遺跡である。現在の行政区画では、本町1・2丁目、東本町1~5丁目、北本町2丁目、光町1・2丁目、桜ヶ丘1~4丁目、荘内町1・2丁目、旭ヶ丘1丁目の一部がその範囲に含まれる。遺跡範囲内の現地表の標高は、T.P.+7.0~9.2mを測る。

東郷遺跡は、東を生駒山地、南を羽曳野丘陵・河内台地、西を上町台地、北を淀川に面されている河内平野の南部の北寄りに位置する。河内平野の南部は、旧大和川水系の平野川・長瀬川・楠根川・玉串川・恩智川が西ないし北方向に放射状に流れている。東郷遺跡は、旧大和川水系のうち旧大和川の主流であった長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地上に位置する。

今回、東郷遺跡第65次調査を実施した近鉄八尾駅前とその東側では、昭和55(1980)年の八尾都市計画事業近鉄八尾駅前土地区画整備事業以降、ビル・共同住宅・店舗の建設などの各種工事、および楠根川河川改修工事によって破壊される遺跡を対象とした発掘調査が大阪府教育委員会(以下、府教委とする)・八尾市教育委員会(以下、市教委とする)・(財)八尾市文化財調査研究会(以下、調査研究会とする)により実施されている。

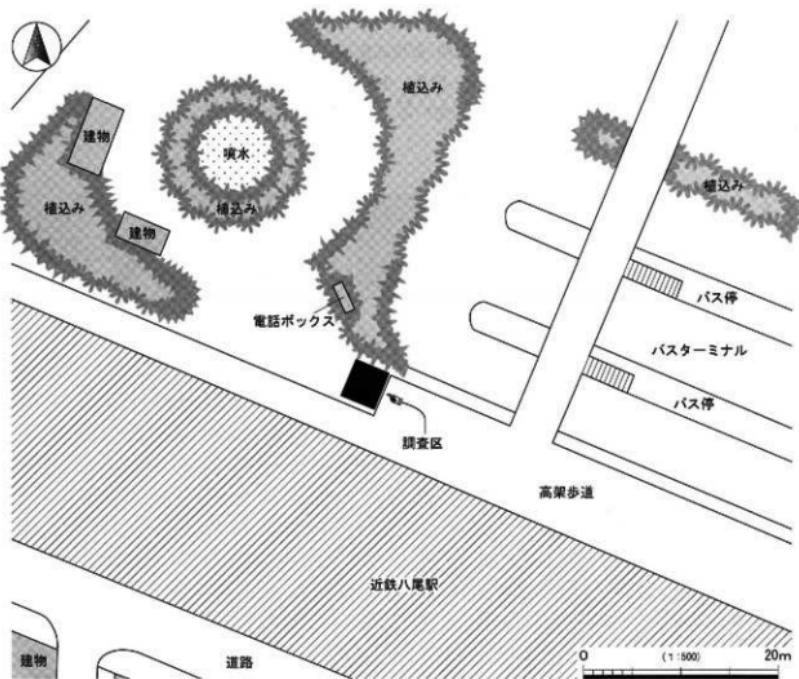
その結果、古墳時代初頭(庄内式期)~前期(布留式期)を中心とする居住域を構成する竪穴住居・掘立柱建物、墓域を構成する方形周溝墓・墳墓、生産域を構成する畦畔・水田などが検出されており、当該時期の遺構群の推移が確認されている。



第2章 調査概要

第1節 調査の方法と経過

本書で報告する東郷遺跡第65次調査(T.G.2005-65)は、エレベーター設置工事に伴い破壊される部分を対象に実施したものである。調査地は、八尾市光町1丁目の近鉄八尾駅の北側に位置し、南南西-北北東方向に僅かに長い長方形を呈する(第2図)。調査面積は、市教委による埋蔵文化財調査指示書によるとエレベーター設置部分の9.59m²であったが、工事に伴う鋼矢板をエレベーター設置部分より外側に打設してあったため、実際の調査面積は14.64m²を測る。地区割の設定については、調査地が狭小であったため行わなかった。掘削に際しては指示書に基づき、現地表(T.P.+8.2m)下1.0mを重機による掘削の対象範囲とし、以下1.0mについては重機と人力を併用して掘削を行い、道構・遺物の検出に努めた。調査の結果、古墳時代後期以降の落込み1箇所(落込み01)と古墳時代初頭前半の落込み1箇所(落込み02)を検出した。出土遺物は、整理用コンテナ(60×40×20cm)1箱を数える。



第2図 調査区位置図

第2節 層序(第3図)

今回の調査地では、近鉄八尾駅前の開発に伴う土地造成により、旧耕作土である1層とそれ以前の耕作土である2層は殆ど残っていなかった。3層は、不均質で酸化マンガン斑が密に見られることから、畑耕作土と考えられる。1~4層は、遺物を殆ど含んでおらず、僅かに出土した遺物も細片で、各層の時期を比定することはできない。5~7層は砂の混じりの多寡が径数cm単位で異なり、6層はさらに下位層が細かいブロック状・マーブル状に混じり、炭化物粒も混じることから、5~7層は人為的な攪拌により形成された土壤で、水田耕作土と考えられる。5層から須恵器が、6・7層からは古式土師器のみが出土することから、時期を異にする水田耕作によって形成されたことが看取される。8層は、泥質の砂層で、上面に踏込み・耕起に起因すると考えられる窪みが見られる。

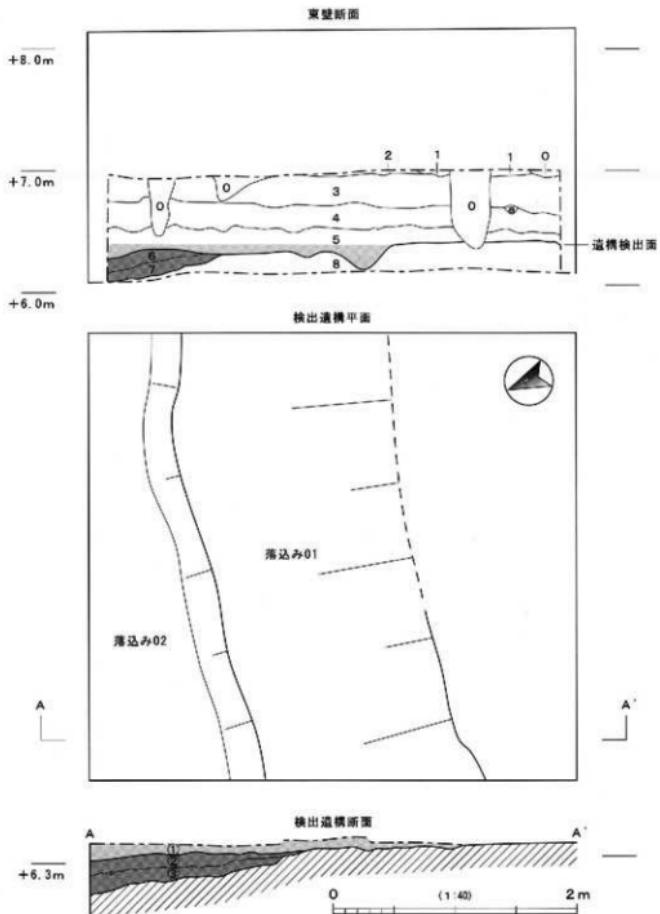
- 0層 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルト。【盛土・搅乱埋土】
- 1層 5BG3/1暗青灰色中粒の中疊以細の礫混じる砂質シルト。【旧耕作土】
- 2層 2.5GY3.5/1暗オリーブ灰色中粒の中疊以細の礫混じる砂質シルト。【耕作土】
- 3層 5Y4.5/1灰色粗粒の中疊以細の砂礫質泥。不均質なブロック状で下部に4層のブロックが混じる。斑状の酸化マンガンが密に沈着。【畑耕作土】
- 4層 2.5Y5/1黄灰色極細粒砂混じる粘土質シルト。上部は泥質極細粒砂。上層からの糸根状・しみ状の酸化鉄が密に、斑点状の酸化マンガンが少量沈着。
- 5層 2.5Y4/1黄灰色粗粒砂以細の砂混じる粘土質シルト。上層からの糸根状の酸化鉄が沈着。須恵器出土。【落込み01埋土】
- 6層 10YR3/1黒褐色粗粒砂以細の砂混じる粘土質シルト。粒状の炭化物を含む。上層からの糸根状の酸化鉄が沈着。7層が細かいブロック状(一部マーブル状)に混じる部分が見られる。古式土師器出土。【落込み02埋土】
- 7層 2.5Y4/1黄灰色粗粒砂以細の砂混じる粘土質シルト～シルト質粘土。上層からの糸根状の酸化鉄が沈着。古式土師器出土。【落込み02埋土】
- 8層 2.5Y4.5/2暗灰黄色泥質の粗粒砂以細の砂。無層理。上部に上層からの糸根状の酸化鉄が沈着。8層の上位に5層が直接載る部分では、上部に5層で充填された窪みが見られる。上面は第1面。

第3節 検出遺構と出土遺物

8層上位(1. P. + 6.4m)で、古墳時代後期以降の落込み1箇所(落込み01)と古墳時代初頭の落込み1箇所(落込み02)を検出した。

落込み01(第3図、図版1)

調査地の北半部で検出した。南側を除き調査地外に至るため全容は不明である。検出部分で東西幅3.6m・南北幅3.0m・深さ0.1mを測る。埋土は、第3図の通りで、落込みに堆積する黄灰色粗粒砂以細の砂混じる粘土質シルト(層序の5層)である。出土遺物は、古式土師器・土師器・須恵器(田辺編年MT15型式)の破片である。形成時期は、出土遺物から古墳時代後期以降と考えられる。落込み01は、検出面より下位に残る層序の5層を検出したもので、層序の5層を耕作土とする水田耕作に伴って形成されたものと考えられる。



【東壁新地面層】

- 層 岩土・擾乱埋土
- 1層 5B63/1薄青灰色擾亂じる砂質シルト
- 2層 2. 5Y63. 5/1暗オリーブ灰色擾亂じる砂質シルト
- 3層 5Y4. 5/1灰色砂質泥炭
- 4層 2. 5Y5/1黄灰色細粒砂混じる粘土質シルト
- 5層 2. 5Y4/1黄灰色細粒砂混じる粘土質シルト
- 6層 10YR2/1黒褐色細粒砂混じる粘土質シルト
- 7層 2. 5Y4/1黄灰色細粒砂混じる粘土質シルト
- 8層 2. 5Y4. 5/2暗灰黄色泥質粗粒砂
- a層 5Y4/1灰色粗粒砂

【透構埋土】

- 落込み 01 ① 2. 5Y4/1黄灰色粗粒砂混じる粘土質シルト
(東壁の5層相当)
- 落込み 02 ② 10YR2/1黑色粗粒砂混じる粘土質シルト
(東壁の6層相当)
- ③ 5Y4/1灰色粗粒砂混じる粘土質シルト
(東壁の7層相当)

*平面図の縁部は、東壁の地層に基づき復元。

第3図 東壁断面および検出透構平面・断面図

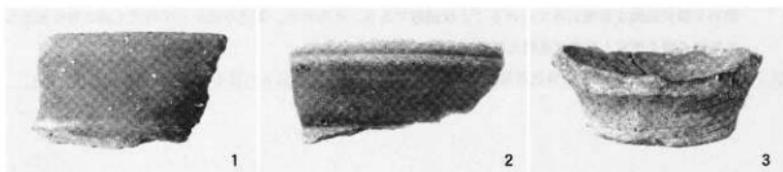
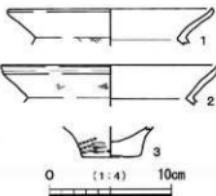


写真1 落込み02出土遺物

落込み02(第3・4図、写真1)

調査地の北部で検出した。南側を除き調査地外に至るため全容は不明である。検出部分で東西幅3.6m・南北幅1.4m・深さ0.2~0.3mを測る。埋土は、第3図の通りで、上層の炭化物を粒状に含む黒色粗粒砂混じる粘土質シルト(層序の6層)と下層の灰色粗粒砂混じる粘土質シルト(層序の7層)の2層からなる。埋土からの出土遺物は、古式土師器の破片である。そのうち上層から出土した1~3を図化した。1・2は、庄内式壺の口縁部。共に「く」の字に屈曲する口縁部を持ち、口縁端部はつまみ上げられている。2は口縁外端面に強いナデによる凹線が残る。3はV様式系壺の底部。僅かに突出した平底で、底面は僅かに窪む。外面に右上りのタタキを施し、内面は板ナデの痕跡を残す。1~3は共に、胎土に生駒西麓産の角閃石を含む。帰属時期は、出土遺物から古墳時代初頭(庄内式期)に比定できる。落込み02は、落込み01の埋土を除去し検出したもので、層序の6・7層を耕作土とする水田耕作に伴って形成されたものと考えられる。



第4図 落込み02出土遺物実測図

第3章 まとめ

今回の調査の結果、古墳時代初頭と古墳時代後期の落込みを検出した。これらの落込みは、当該時期の地形に沿った水田耕作に伴い形成されたものと考えられる。当調査地の約90m北西側の第25次調査地南部で、古墳時代初頭の生産域を構成する畠畔・水田・溝が検出されている。^{参考}既往の調査成果では、近鉄八尾駅北側のバスター・ミナル・噴水があるところは、古墳時代初頭には沢沼地で、その北側が居住域とされている。今回の調査で、第25次調査地南部から沢沼地とされていた当調査地にかけて、当該時期の生産域(水田)が広がる可能性が高いことを確認した。

註記

- 註1 東郷遺跡における遺構群の時期的推移については、原田昌則 1999 「II 東郷遺跡第37次調査(TG91-37) 第2章 地理・歴史的環境」『財團法人八尾市文化財調査研究会報告64』に詳しい。記載されてから現在までに、当遺跡内における発掘調査による資料の増加・新たな知見はあるが、記載内容に大きな変更をもたらすものではない。
- 註2 庄内式土器とV様式系の土器が併存することは、一般的に認められていることであり、V様式壺と庄内式

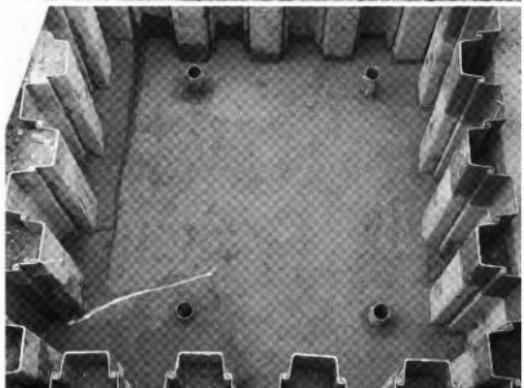
別のV様式系甕を形態のみで分けることは困難である。そのため、落込み02から庄内式土器と共に出土したV様式甕を便宜上V様式系甕と呼称した。

註3 西村公助 1995 「I 東郷遺跡第25次調査(T G87-25)」『財團法人八尾市文化財調査研究会報告45』

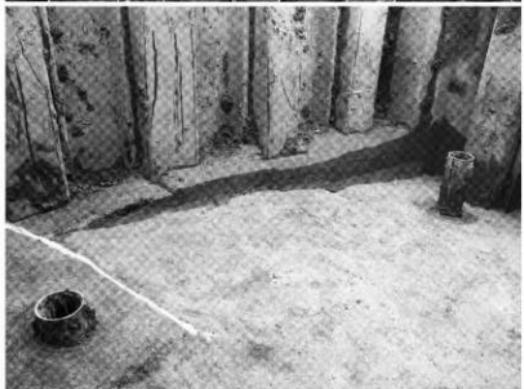
図 版



東壁地層断面（西から）



造構検出面全景（南から）



落込み01・落込み02埋土断面
(北西から)

V 水越遺跡第9次調査(MK2006-9)

例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市服部川1丁目地内で実施した農道整備工事に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する水越遺跡第9次(MK2006-9)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会作成の指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が申請者から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成18年9月4日～9月11日(実働5日間)にかけて、樋口　薰を調査担当者として実施した。調査面積は約66m²である。
1. 現地調査では、市森千恵子・鈴木裕治・鷹羽佑太・中尾優司・細谷利美の参加を得た。
1. 内業整理は、現地調査終了後、随時実施し、平成18年12月28日に完了した。
1. 本書に関わる業務は、遺物実測－藤中貴子・図面トレース－樋口、写真撮影－垣内洋平、写真編集－垣内・樋口、本書の執筆及び編集－樋口が担当した。

本　文　目　次

第1章 はじめ	31
第2章 調査概要	33
第1節 調査の方法と経過	33
第2節 検出遺構と出土遺物	34
1) 基本層序	34
2) 検出遺構と出土遺物	34
第3章 まとめ	36

挿　図　目　次

第1図 調査地周辺図	31
第2図 調査区位置図	33
第3図 南壁断面図(S=縦:1/40 横:1/200)	35
第4図 8層内出土遺物	36

表　目　次

表1 調査地一覧表	32
-----------	----

図版目次

図版一 調査地周辺状況(北東から)

南壁断面(東端から10.4~12.3m付近)

南壁断面(東端から30.0~32.0m付近)

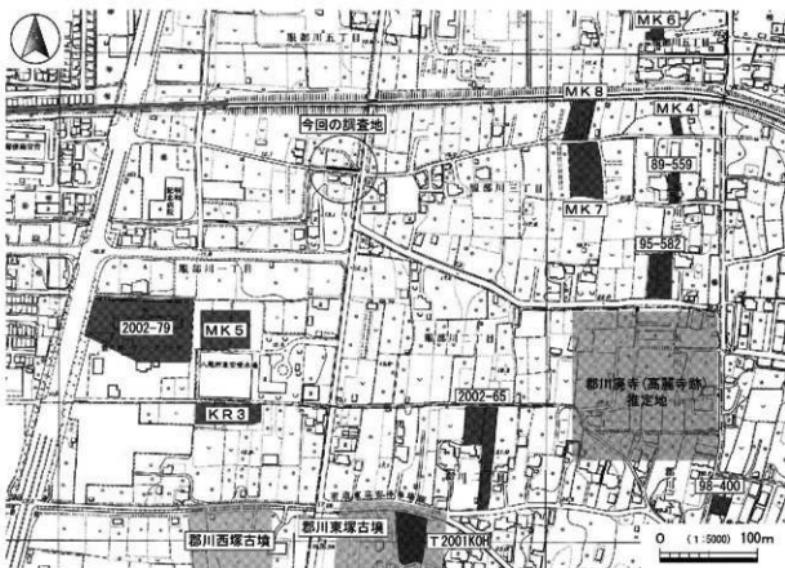
図版二 8層内出土遺物

第1章 はじめに

大阪府の東部に所在する八尾市は、東を生駒山地、西を上町台地、南を羽曳野丘陵、北を淀川によって区画された河内平野の南東部を占める。今回報告する水越遺跡は、本市東部の生駒山地西麓部に発達した緩扇状地上(標高12~55m)に立地する。現在の行政区画では、水越・千塚・大塚・服部川の東西約1.25km、南北約1.2kmがその範囲と推定されている。

本遺跡を含む生駒山地西麓部には、多くの遺跡が分布する。北には、弥生時代後期初頭の鉄造鉄剣や古墳時代前期の瑪瑙製鎌形石製品を出土した大竹西遺跡をはじめ、大竹遺跡、太田川遺跡などの縄文時代以降の複合遺跡が展開するほか、古墳時代中期前半に造営された中河内地域最大の前方後円墳である心合寺山古墳(墳丘長160m以上)や中期後半に比定される鏡塚古墳(径約28mの円墳または前方後円墳と推定される)が知られる。東を見ると、生駒山地尾根上には、古墳時代後期以降に築造された高安古墳群(180基以上)が群集している。南には、高安古墳群にさきがけて横穴式石室を採用し、盟主的な役割を担ったことが推測される郡川西塚古墳・東塚古墳が、南北を貫く東高野街道を挟んで東西に対峙している。時代が下ると、本遺跡の南端付近において郡川庵寺(高麗寺跡:奈良時代前期~鎌倉時代)の建立が推測されるが、詳細は分かっていない。

本遺跡は、大正9(1920)年、清原得敬氏によって石鐵が採集されたことに端を発する。その後、昭和5(1930)年には、勾玉研磨用の筋砥石をはじめ、滑石製小玉や管玉の未完成品といった石製品



第1図 調査地周辺図

表1 調査地一覧表(地図番号は第1図に対応)

地図番号	調査名 (路号)	所在地	面積 (m ²)	調査機関	文献
MK 4	水越第4次 (MK80-4)	服部川175-4	40	八文研	高萩千秋「1992年『水越遺跡第4次調査(MK91-4)』」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』(財)八尾市文化財調査研究会報告34』(財)八尾市文化財調査研究会
MK 5	水越第5次 (MK95-5)	服部川1丁目102番地	2000	八文研	坪田真一「1996年2月、水越遺跡第5次調査(MK95-5)」『平成7年調査』(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
MK 6	水越第6次 (MK96-6)	服部川5丁目7~12番地	140	八文研	高萩千秋「1998年X月、水越遺跡第6次調査(MK96-6)」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』(財)八尾市文化財調査研究会報告60』(財)八尾市文化財調査研究会
MK 7	水越第7次 (MK2000-7)	服部川3丁目74-2	560	八文研	成海佑子「2001年II月、水越遺跡第7次調査(MK2000-7)」『八尾市埋蔵文化財発掘調査センター報告書2』平成12年度』八尾市教育委員会・(財)八尾市文化財調査研究会
MK 8	水越第8次 (MK2005-8)	服部川3丁目14番、15-1番	356	八文研	坪田真一「2006年2月、水越遺跡第8次調査(MK2005-8)」『平成17年度』(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
MK 9	水越第9次 (MK2006-9)	服部川1丁目	66	八文研	本書に掲載
89-559	水越 (89-559)	服部川470-2	—	市教育委員会	吉田野乃「1991年7月、水越遺跡(89-559)の調査」『八尾市内遺跡平成2年度発掘調査報告書1』八尾市文化財調査報告22』八尾市教育委員会
95-582	水越 (95-582)	服部川3丁目102番2	10	市教育委員会	清森「1997年1月、水越遺跡(95-582)の調査」『八尾市内遺跡平成8年度発掘調査報告書1』八尾市文化財調査報告28』八尾市教育委員会
2002-79	水越 (2002-79)	服部川1丁目92番地他9番	27	八文研	樋口一葉「2002年1月、水越遺跡(2002-79)の調査」『八尾市内遺跡平成14年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告48』八尾市教育委員会
KR 3	郡川第3次 (KR94-3)	郡川1丁目19、10番地	1188	八文研	坪田真一「1998年10月、郡川遺跡第3次調査(KR94-3)」『平成6年調査』(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
98-400	郡川 (98-400)	郡川5丁目50	9	市教育委員会	吉田野乃「1999年6-3月、郡川遺跡(98-400)の調査」『八尾市内遺跡平成2年度発掘調査報告書1』八尾市文化財調査報告40』八尾市教育委員会
2002-65	郡川 (2002-65)	郡川2丁目33番1	27	八文研	成海佑子「2003年1月、郡川遺跡(2002-65)の調査」『八尾市内遺跡平成14年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告48』八尾市教育委員会
T2001KOH	郡川東塚古墳 (T2001KOH)	郡川3丁目56番地	630	八文研	樋口一葉「2005年『郡川東塚古墳第1次調査(T2001KOH)』」『八尾市立樋口一葉文化財調査センター報告7』平成17年度』
郡川高寺 (高麗寺跡) 推定地	郡川高寺 (高麗寺跡)	郡川1丁目	—	—	吉岡智「1988年第5章『史跡考古学からみた八尾、舞之瀬、牛臥山地西麓の古代中院と高安城』」『八尾市史』八尾市役所

※調査機関= 市教委:八尾市教育委員会 八文研: (財)八尾市文化財調査研究会

が表探されたほか、昭和9(1920)年には、東高野街道(現、旧国道170号線)の改修工事が行われ、弥生時代後期に帰属する土器の出土を見た。

昭和53(1978)年、本遺跡内において初となる木格的な調査(府立済友高校新設工事に伴う発掘調査)が大阪府教育委員会により行われ、縄文～鎌倉時代の遺構・遺物が検出された。特に弥生～古墳時代にかけては、方形周溝墓をはじめとする墓域を検出したほか、古墳時代中期には玉作りに関連する遺跡であったことを示唆する、滑石製管玉の未完成品などの石製品が多く出土した。この内後者については、本遺跡の東部に鎮座する式内社玉祖神社との関係が注目される。

その後、八尾市教育委員会・当調査研究会による数次の調査が行われ、縄文時代中期～近世に至る複合遺跡として認識されるようになってきた。

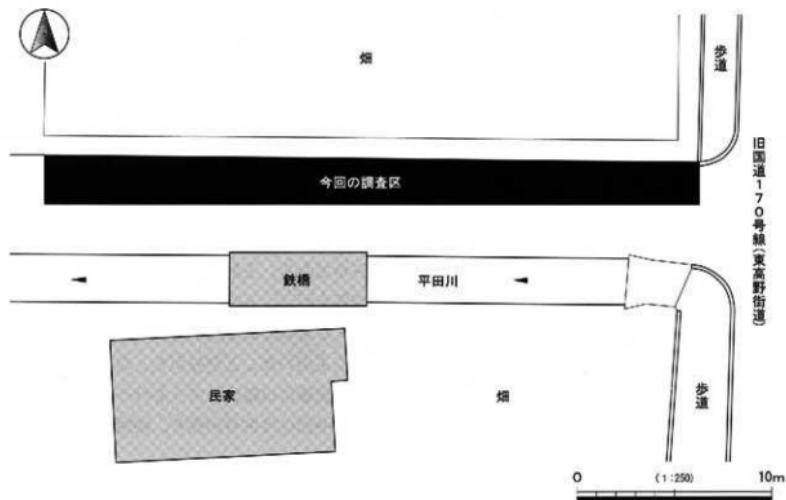
本遺跡の南端付近に位置する今回の調査地周辺を見渡すと、南西へ約200mの地点で実施の第5次調査(MK95-5)では、弥生時代後期の溝をはじめ、古墳時代前期の堅穴住居、掘立柱建物、井戸などで構成された居住域や、方形周溝墓などの墓域、平安時代末～中世の水田を主体とした

生産関連遺構を検出した。一方、南東400m地点で実施の95-582調査では、本遺跡内最古となる縄文時代中期末の居住域を構成する遺構・遺物を検出した。東へ約250mの地点で行われた第7次調査(MK2000-7)では、縄文時代晩期後半の土器埋納の可能性が高い土坑をはじめ、弥生時代後期の居住域を構成する遺構群、平安時代の地鎮に関連した可能性が推測される土器埋納土坑などを検出した。ここからさらに北東へ100m先で実施の第4次調査(MK91-4)では、弥生時代後期の遺物包含層を確認したほか、古墳時代後期～奈良時代に比定される北東から南西に流下する流路内からは、鍛をはじめとする木製品の出土を見た。本調査地の北東200～350m地点にあたる第6次調査(MK96-6)や第8次調査(MK2005-8)では、弥生時代後期の溝、流路、古墳時代以降の流路を検出した。今回の調査では、これらの成果を念頭におきつつ、遺構・遺物の検出に努めた。

第2章 調査概要

第1節 調査の方法と経過

今回の調査は、農道整備工事に伴うもので、当研究会が水越遺跡で実施した第9次調査(MK2006-9)にあたる。調査区は1箇所で、東西に長い長方形(東西33m、南北2m)を呈する。調査は、八尾市教育委員会の指示書に基づき、現地表(T.P. +14.746m: 平均値)下0.5～2.2mまでを機械により、以下0.5mについては、機械と人力で掘削し、遺構・遺物の検出に努めた。調査で使用した標高は、本調査地の南約350mに位置する水準点(番号2858): T.P. +16.871mである。



第2図 調査区位置図

第2節 検出遺構と出土遺物

1) 基本層序

現地表(東端: 14.840m 西端: 14.653m)下0.2m前後までは、現代に造成された道路に伴うアスファルト、およびバラス敷(0層)。以下現地表下2.5m前後までの2.3m間において8層の地層を確認した。1層は、本調査区の南を東西に流れる現平田川の護岸整備に伴う盛土である。にぶい黄橙色中粒砂～粗粒砂(1-1層)と灰褐色細粒砂～極粗粒砂(1-2層)から成る締まりの悪い地層である。2層は、褐灰色粘土質シルト～シルト。著しく攪拌を受けた淘汰不良の地層である。本調査区の北に展開する現代の畑の南への続きに相当する。3層は、本調査区東方でのみ確認した砂質優勢の河川堆積物である。粒度組成の相違から2層(3-1・2層)に細分できた。この内3-2層にはラミナ構造が顕著である。4・5層は、粘土質シルト～中粒砂から成る淘汰不良のブロック層である。この内5層は3層(5-1～3層)に細分できた。6層は、本調査区の東方でのみ確認した砂質優勢の河川堆積物である。3-2層同様ラミナ構造が顕著である。7層は、後述する8層河川堆積物の土壤化部分に相当する。3層(7-1～3層)に細分できた。8層は、概ね東から西に流向をもつ砂礫優勢の河川堆積物である。現平田川の前身河川に相当する可能性が考えられる。本層内には、土師器や須恵器、丸瓦、平瓦などが混在する。粒度組成やラミナ構造の差異により10層(8-1～10層)に区分できた。

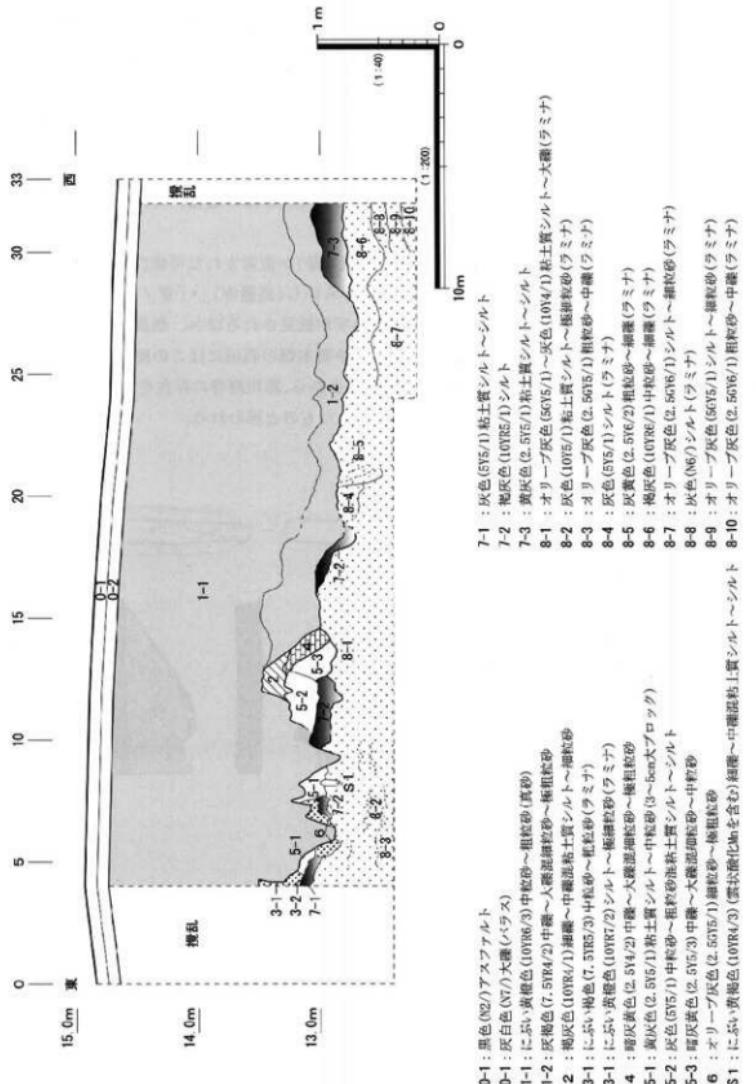
2) 検出遺構と出土遺物

検出遺構はなし。出土遺物は、1・4・8層内から少量の遺物が認められる。総遺物量はコンテナ1箱である。以下、各遺物について概説を行う。

1層内出土遺物 土師器すり鉢細片、陶磁器細片、空き缶など、近世～現代の遺物が出土した。いずれも碎片であったため、図化はしていない。

4層内出土遺物 陶磁器、平瓦などの碎片が出土した。図化は不可。

8層内出土遺物 概ね奈良～平安時代に帰属する遺物の出土をみた。1は土師器杯の口縁端部～杯部碎片。口縁端部付近で小さく外反する個体である。調整は横ナデを行うが、体部外面には及ばず、指頭成形後未調整で終わっている。2は土師器碗の口縁端部～体部碎片。口縁部は小さく外反し、端部は丸く終わる。調整は横ナデを行う。3は土師器羽釜の鉢部碎片。鉢部は水平に伸び、端部は丸く終息する。4は須恵器の器種不明高台部碎片。高台は逆台形を呈する。調整は回転ナデ。5～7は丸瓦である。このうち5・6は、砲弾形の模骨を用いて製作した丸瓦胴部～玉縁連続部の碎片である。卡縁部は若干なで肩を呈する。凹面には1枚から成る布目が残ることから、胴部と玉縁部が運動して形成されたことは明らかである。玉縁端部にはケズリを施す。凸面は摩滅のため不明瞭であるが、玉縁部は横位ナデ調整を行う。玉縁の成形については、両者とともに大脇分類のC-2手法に区分され、平安時代に帰属するものである。7は広端面付近の碎片である。凹面には糸切り痕が明瞭に残ることから、粘土板を用いたことが分かる。布目も顕著である。凹面は横位ナデ後縦位ナデを施す。広端面と凹・凸側縁には縦位ケズリを行う。焼成は良好で、須恵質を成す。8は平瓦狭端面付近の碎片である。凹面には布目が残り、狭端縁には横位ケズリが行われる。凹面はナデ。

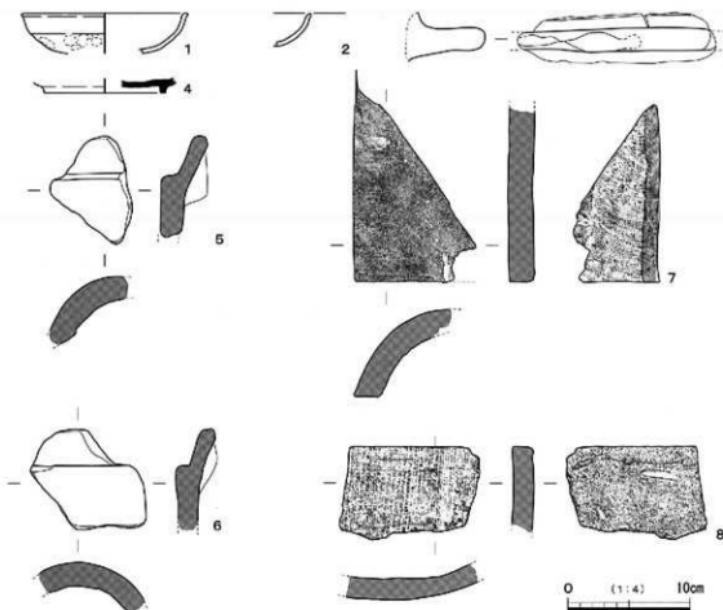


第3図 剖面断面図(S=縦 : 1/40 横 : 1/200)

第3章 まとめ

今回の調査における最大の成果は、8層河川堆積物を確認したことである。本層は、①現平田川を複写するように東から西に流向を有する、②シルト～30cmの大礫で構成される、③この内中礫～大礫については、角をもったものが多い、④土師器や須恵器をはじめ、丸瓦や平瓦が混在する、などの特徴を挙げることができる。つまり本層は、生駒山地西麓部を西に流下する扇状地性の河川堆積物であり、しかも本調査地の上流には、奈良時代以降の遺物、特に丸・平瓦を必要とした遺跡の存在した可能性が高くなつた。

今回の調査地の南東約250m付近には、郡川廃寺(高麗寺跡)が造営された可能性が指摘されている。付近には、「こうらい(高麗・高米・古米)」・「こうらいじ(高麗寺)」・「堂ノ前(堂前)」・「堂ノ西(堂西)・堂ノ北・城ノ内・地蔵前・垣内などの小字が散見されるほか、奈良時代以降の土師器や須恵器、瓦などの出土も確認された。また、水田や植木畑の石垣にはこの廃寺に使用されたと推測される柄を有する礎石が現存している。以上のことから、郡川廃寺の存在を肯定しているが、今回の調査成果により、さらに、その可能性が高くなつたものと思われる。



第4図 8層内出土遺物

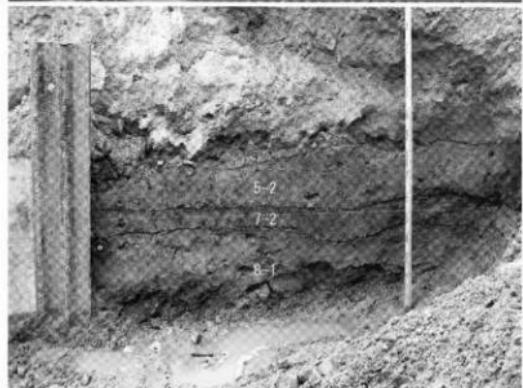
参考文献

- ・(財)大阪文化財センター 1976 「高安の遺跡と遺物」『大阪文化誌 季刊第2巻・第2号・通巻第6号』
- ・大阪府教育委員会 1978 『府立清友高等学校新築工事に伴う発掘調査現地説明会資料』
- ・吉岡 哲 1988 「河内の玉作遺跡—本校敷地周辺の遺跡とその性格—」『紀要 清友 第1号』 大阪府立清友高等学校
- ・大脇 肇 1991 「研究ノート 丸瓦の製作技術」『研究論集IX 奈良国立文化財研究所学報 第49冊』 奈良国立文化財研究所
- ・吉岡 哲 1988 「第五章 歴史考古学からみた八尾 第二節 生駒山地西麓の古代寺院と高安城」『八尾市史(前近代)本文編』 八尾市役所

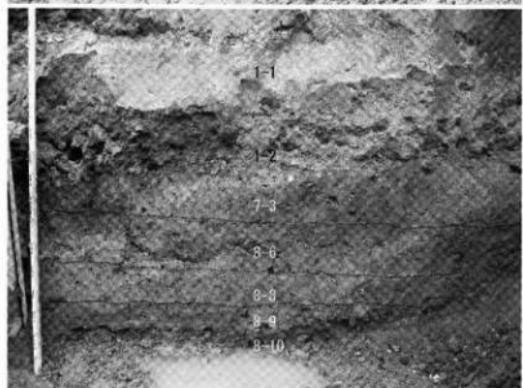
図 版



調査地周辺状況(北東から)



南壁断面
(東端から10.4~12.3m付近)



南壁断面
(東端から30.0~32.0m付近)

圖版二
8層內出土遺物



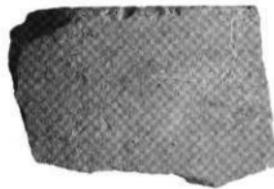
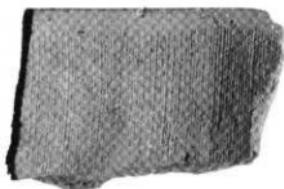
5



6



7



8

報告書抄録

ふりがな 書名	さいだんほうじん やおしぶんかざいちょうさけんきゅうかいほうこく99
財団法人	八尾市文化財調査研究会報告99
副書名	I 植松道跡(第9次調査) II 郡川遺跡(第5次調査) III 心合寺山古墳(第6次調査)
卷次	IV 東部遺跡(第65次調査) V 水越遺跡(第9次調査)
シリーズ名	財団法人 八尾市文化財調査研究会報告
シリーズ番号	99
編集者名	I・II 西村公助 III 島田裕弘 IV 岩川和哉 V 香川 嘉
編集機関	財団法人 八尾市文化財調査研究会
所在地	〒581-0821 大阪府八尾市垂町4丁目58 2 TEL・FAX 072-994-4700
発行年月日	西暦2007年3月31日

ふりがな 所収道跡	ふりがな 所 在 地	コード 市町村 道跡番号	北緯	東經	調査期間	調査面積 (m ²)	調査 原因
			北緯	東經	調査期間	調査面積 (m ²)	
うえのまつりやまき 植松道跡 (第9次調査)	おおさかみやまきしょくまくわくとうじょうあ 大阪府八尾市横松町7丁目	27212	63	34度36分 135度35分 48秒 37秒	20051115～ 20051122	約34.9	防火水槽
こおりがわせき 郡川遺跡 (第5次調査)	おおさかみやまきしょくまくわくとうじょうあ 大阪府八尾市敷岸町5丁目	27212	60	34度36分 135度37分 59秒 49秒	20051214～ 20051220	約34.9	防火水槽
こころとせきふん 心合寺山古墳 (第6次調査)	おおさかみやまきしょくまくわくとうじょうあ 大阪府八尾市大竹町5丁目	27212	10	34度38分 135度38分 23秒 27秒	20060904～ 20060920	約93.25	道路整備
とうじゆうせき 東部遺跡 (第65次調査)	おおさかみやまきしょくまくわくとうじょうあ 大阪府八尾市光町1丁目地内	27212	37	34度37分 135度36分 48秒 11秒	20060126～ 20060127	約9.59	市道369 号線昇降設置
みずごうせき 水越遺跡 (第9次調査)	おおさかみやまきしょくまくわくとうじょうあ 大阪府八尾市服部川1丁目	27212	42	34度37分 135度38分 24秒 15秒	20060904～ 20060911	約66	農道整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
植松道跡 (第9次調査)	集落	奈良時代	土坑2	上師器・須恵器	
郡川遺跡 (第5次調査)	牛廐	縄文時代～室町時代	窓2	上師器・瓦器	
心合寺山古墳 (第6次調査)		平安時代後期	落込み		
東部遺跡 (第65次調査)	集落	弥生時代後期	土坑	弥生土器	
水越遺跡 (第9次調査)	生産	古墳時代初頭	落込み	古式土師器	
	生産	古墳時代後期以降	落込み		
	集落	奈良時代～平安時代	河川	土師器・須恵器・瓦	

要 約	植松道跡第9次では奈良時代の土坑を検出した。同時代の遺構は南側の第3・8次調査でも検出しており、付近一帯に居住城が存在していることが判明した。郡川遺跡第5次では縄文～室町時代の耕作跡を検出した。同時代の生産城が広がっていることが判った。心合寺山古墳第6次では弥生時代後期の井戸を検出した。また平安時代後期の落込みも検出した。この落込みは心合寺山古墳の後円部を沿ったカーブを描いていることから、古くは湖底であった可能性も考えられる。東部遺跡では古墳時代初頭と同後期以降の落込みを検出した。水越遺跡第9次調査では河川堆積を認めた。この河川内からは土師器・須恵器のほか丸瓦と平瓦が出土しており、当調査地の東側にこれらの遺物を必要とした遺跡が存在していた可能性が高い。
-----	--

財團法人八尾市文化財調査研究会報告99

- I 植松遺跡 (第9次調査)
- II 郡川遺跡 (第5次調査)
- III 心合寺山古墳 (第6次調査)
- IV 東郷遺跡 (第65次調査)
- V 水越遺跡 (第9次調査)

発行 平成19年3月
編集 財團法人 八尾市文化財調査研究会
〒581-0821
大阪府八尾市幸町4丁目58番地の2
TEL・FAX 072(994)-4700

印刷 服部印刷株式会社
〒578-0903 東大阪市今米1 16-1
TEL 072(961)-1634
表紙 レザック66 <260kg>
本文 ニューエイジ <70kg>
図版 マットアート <110kg>

